62-377

國語講讀

飯田永夫

◎國語講讀科ノ本旨

この講義録の本科は、專ら實用を旨とし、高尚ゴ馳せも、迂遠に陷らも讀者をして國語の大体ゴ通せしめ、國文をよく讀み、よく解せしむるにあり。しかして讀者の注意すべき箇條左の如し。

第一　本文の讀方に注意をべき事。

第二　本文の事を了解すると、同時によく國語、用法を記憶をる事。

○讀方ハ最モ大切ナルモノニシテ、音ニハ音勢、語ゴハ語勢其他曲折、轉調等の法あり。全体讀方を正しく讀む時は、本人は勿論、傍聽者までも明瞭に理會をることを得るものなればなり。されど講義録ゴ於てこの讀方を教ふるは最困難なれば、先符標をあげて、その大要を心得しめむとを」（尚讀方諸法の委しきことは他日本科の附録に記載をるを見よ）

音聲符

○○
○○　文字の右の肩にあるは去聲なり、右の下にあるは入聲なり、左の肩にあるい上聲、左の下にあるい平聲なり、

挿語符

（　）　彎鉤は挿語の標なり。

句讀符

、（句点）　これは文意結了せざるも、一句の内にて詞を讀み切る所に付す、ゆゑにこの点ある處にては、聲を平調に保ちて、一音を發聲するたけ休止す。

。（句点）　これは文意終る所に付す、ゆゑにこの点ある處にては、聲を下けて、文意結了の意を示し、三音を發聲するたけ休止す。

」（段落点）　これは一段の文意全く終る所に付す、ゆゑにこの点ある處にては、聲を下けて、文意完結の意を示し、五音を發聲するたけ休止す。

○文意を理解せしむるためには、簡單にその大意を述べ、國語、用法の主なるものをば、時々その下に特記すべし

○講讀の程度は、先今日の文を講讀せしめ、後に中古のものに及ぶべきなれど、僅々一ケ年の課定なれば、そのやうにはなしがたし、よりて今は中古体にて、今日の文に最も近き、方丈記によりてはじむべし」

◎方丈記いてと

この書は、鴨長明が多くの年頃、さまざまの憂にあひたる事どもを書き集められたるもの、即、安元三年四月廿七日大火、治承四年四月廿九日の大風、同年六月遷都、養和の頃の飢饉、天暦二年の大地震の事などを、つまびらかにしるされたり、さて方丈記と名づくるてとは、巻末に大原山閑居の様をいふ所に（その家のありさま世の常にも似ず、廣さは僅かに方丈、高さは七尺のうちなり）とあり、この少なる方一丈の草庵にて、右の事實またこの閑居を造れる由來をも記せるゆゑに、方丈記といふ、この記は、順德天皇の御代、建保の頃（大概六百八十餘年前）かゝれたるものならむといふ。○この文の結構につきては、有名なる枕草紙と甲乙なしといふ、先輩の評論さへあれば、今又贅言を加へそ」

◎鴨長明のてと

長明は山城國加茂の社の氏人なり。父を長繼といひ、祖父を季長といふ。いづれも加茂社の禰宜なりき。長明生死の年月詳ならそ、ある説に、久壽元年に生れ、建保四年に寂せりといふ。長明幼にして祖母に養はれ、人となり文才あり、後鳥羽上皇其

才學を愛せられ、和歌所の寄人まあけ給へり、然して長明の素志い、父祖の業を繼ぎて加茂の社司たらんとそるにあり、此を奏請せしに、許されざりしかば、素望のかなはさるを憤りて、寄人をも辭退し遂に出家して、名を蓮胤と改め、洛外の大原山に隱遁し、後更に宇治の木幡山の東北なる、日野の外山まに、方丈の草庵を結ひて幽居し、專ら老莊の道を樂しみ世を卒へたりといふ。

方丈記

行く川のなかれは、絶にぞして、しかも本の水にあらぞ。よどみに浮ぶうたかたは、かつきえかつ結びて、久しくとゞまる事なし。

○行く川の云々　流れ行く川水の、その流は常に絶え間なく、且今なかるゝ水は、本見し舊の水にあらぞと之〳〵しかも然に、感歎詞の。もをつけたる詞へ、こゝにては、且なといふにあたるこゝは、論語子罕篇ま、子在川上曰逝者如斯不舍晝夜、といふ語につきていへるなるべしといふ。○よどみに浮ぶうたかたは云々　水上に浮ふ泡い、且消且結、即、泡たつと同時に、其泡消えて暫しも存在し、とゞまることなしと之〳〵よどみ　淀にて流水の湛ふ所をいふ〳〵うたかた　水上の泡のこと、空形の轉ならむといふ〳〵かつ　副詞にて、此事をしながら、彼事にもわたり、

彼物あるに、此物のまじれる意にいふ語●こゝは金剛經の、如夢幻泡影如露亦如電、などいへるよりなるならむ。

世の中にある、人とすみかと、又かくのごとし。玉敷の都のうちに、棟をならべ、甍をあらそへる、たかき、いやしき人の住居は、代々をへて盡きせぬものなれど、是をまことかとたづぬれば、むかしありし家はまれなり。或は去年やけて、今年はつくり、或は大家ほろびて、小家となる。すむ人も是よりおなじ。所もかはらず、人もおほかれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に、わづかに一人二人なり。あしたに死し、夕にうまるゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。

○世の中にある云々　世の中の人も、住居も又水泡の如しとゝ。○玉しきの云々

洛中に、棟、瓦を競爭して立構へたる、上下貴賤の人の住居も、父死それは子にゆづり、子は又孫に讓り、代々を經て盡期なきものゝ如くなれど、是を事實に徵それは、大に違へり、昔より繼續せる家はまれなり、或は去年燒けて今年新築し、或は富貴なる大家も燒けて、貧賤なる小家となるとゝ△玉しきの　都、宮などゝいふにかゝる枕詞ゝ△棟　屋根の最も高き處をいふ△甍屋に葺きたる瓦をいふ、鱗の轉なり○すむ人も是におなし云々　住む家さへ上の如くなれば、それに住居をる人もまたこれに同じ、其証據よは、場所は昔に變らぬ、人もまた世に多しといへど、舊より見知りたる人は、二三十人が中よ、僅かに一人か二人位なりとゝ。

●こゝは白居易が詩に、二十年來舊詩卷十人酬和九人無、といふ意に似たり○あしたよ死に夕にうまるゝならひ云々　此文上のよそみに浮ぶうたかたといへる文に應そ。●こゝは莊子の、朝菌不知晦朔註曰菌大芝也亦名日及暮生見日則死、といふ語によれるならむといふ。

しらず。うまれ死ぬる人、何方よりきたりて、いづかたへか去る。

又しらぜ。かりのやどり、誰が爲めにか心を惱し、何によりてか目をよろこばしむる。

○しらぞうまれ死ぬる人云々　生れくる人も、以前、即、過去は何方より、この世即、現在に來り、死ぬる人も、未來は何方へか去るといへるを〈しらぞといふ詞は、いづかたへ去るかをしらぞ、と下にかけて見るべし。●こゝは、解脫上人の、先生又先生不レ知生々前、未生猶未生全無辨世々終、といへるよれるならん○又しらぞかりのやどり云々　生死は一大事のことなれば、しらぬも尤なれど、又しりやそきかりのやどりの事だにしらぞとを。委しくいへは、かりのやどり、即、はかなき世渡りに、靜なる暇なく、一生心を勾相に苦しめ、目をよろこばしむることを、誰がために爲る事か、これだに又しらぞと、世常をふかく歎けかれたるあり。」

其あるじとをみかと、無常をあらうふさま、いはゞ朝がほの露とおとならぜ。あるは露落て花殘れり。殘れりといへども、朝日

にかれぬ。或は花はいしやみて露猶消えず。消えぞといへども、夕をまつおとなし。

○其あるじと云々　心を惱して、家造りせし其主人も遂には死に、そみかも、風などに破られて、主人に先立て壞るゝことは世に多し、されば家は殘りて主は死に、主は殘りて家は壞れ行くが如く、互に無常を競爭せる有樣、譬へていはゞ、人間は朝顏の上にれける露に似たりと也○あるは露落ちて云々　或は露消えて花は殘れども、その花も朝日の爲めに枯れ、或は、花をぼみて露は殘れりといへども、その露も夕方までは殘り得ぞとを。

おのれ物の心をしれりしよりおのかた、四十あまりの春秋を送れるあひだは、世の不思儀をみる事、やゝたび〳〵ならぬ」

○おのれ物の心を云々　長明物の心、即、萬の事を辨へられる頃より、四十年を送れる間に、世の不思議の出來事を見ること漸々多くなりぬとを。即、その不思議

の事實をこれより下ゴ書きつらねたるなり。

注意 今回より、尚、一層讀方に注意を加へむと思ひたれば、本文の平假名の上に、更に、片假名を添へ、時々、讀みの紛らはしきものを明にせむとも例へば、あらそへる、いづかたへか去る、なほ、病人なぞの如し。よりて本文に添へたる片假名は、たゞ讀み聲を記せるものなることを記臆し、また、平假名は正しき假名違なることを心得玉へ、又言語の用法、係結の處ゴは＝符を用ゐて、係の標とし、—符を用ゐて、結の標とせ、これをも心得玉へかし。

去ぬる安元三年四月廿八日かとよ。風はげしく吹きて、しづかならざりし夜、戌の時ばかり、都のたつみより火出来りて、いぬゐに至る。はてには、朱雀門、大極殿、大學寮、民部省などまで移りて、一夜の程ゴ塵灰とかりにき。火本は樋口富小路とかや病人をやどせるかりゐやよりいでたりとなむ。

○去ぬる安元三年云々　これより變災の事實をあげたるゴ。先、去安元三年四月廿八日の事かと、大凡覺えしが、かく〳〵の事ありきとゴ、よは感歎詞にて呼ひかくる聲なり。俗にマア其日の事ヨなどいふヨ＝に同じ。この安元三年は、高倉院の御代の年號ゴて、此年治承と改元あり。長明か二十三四歳の頃ならむ○戌の時ばかり　戌の時は、一晝夜の間を十二ゴ割りたる一分の稱、舊制にては、一晝夜を十二に割り、今制の午後十二時より、午前一時、即、夜の十二時より一時までを子の時といひ、二時より三時までを丑の時といひて、この順ゴ十二支を時に當てはめたるものなれば、戌の時は、今の午後八時より九時までにあたる△はかり　計量などの義にて、程、頃などの意○都のたつみより云々　京都の東南より出火し、西北ゴ延燒し、遂に皇城の朱雀門、大極殿、大學寮、民部省まで燒けて、一夜の間ゴ莊嚴なる京中も灰燼となりきと〳〵△たつみ　方角の稱〳〵、北を子とし、東を卯とし、其間を三分して、其界を丑寅とゼ、これに準して、辰巳を歴て、南を午とし、未申を歴て酉を西とし、戌亥にて終る、たつみは、即、東南の隅、いぬゐは、即、

西北の隅なり△朱雀門　皇城の南門ゝ△大極殿　ダイゴクデンと讀む、大安殿ともいへり、八省院の正中まして、天子朝に臨み給ふ正殿の號△大學寮　縱れ壬生横は二條、西南の角なりき△民部省　職原抄ま、邦國土地之圖、戸口人民之數、此官之所知也とあり。此場所縱は壬生横は大炊御門にて太政官の南也○火本は樋口云々　樋口は、五條の下にある横通りなり、富小路は、京極の次きにある縱通りなり、即、樋口通り富小路か火元なりとゝ○病人をやとせる云々　この火元の本家は、病人を入るゝために、假りま建たる屋敷より起れりとかやいふとゝ△出たりとなむ　このなむといふ辭は、物事を指し定むる意をいふぞといふ辭に似て、それよりやゝ平穩なり、この處にては出たりとなんいふとある格にて、いふと云詞の省かれたるなり。

吹きまよふ風に、とかく移り行くほどに、扇をひろげたるが如くもえひろがりぬ。とほき家い、烟にむせび、ちかきあたりは、一向ほのほを地ゐ吹きたり。空まは、灰を吹きたてたれば、火の光に映じて、あまねく紅なる中ゐ、風に堪へぞ吹き切られたる炎、飛か如くゐて、一二町をおえつゝ移り行く、其中の人うつゝごころあらんや。

○吹きまよふ風　吹き進み紛亂たる風、即、暴風といふ意○とかく移り行くほどに　とかくといふ詞は、カレコレ、アチコチなどいふことにあたる、ここまでは、アチコチといふにて、即、彼方、此方へ燃え移り行く間にの意○もえひろがりぬ　此は、火先いよ〳〵廣大になりたる狀を、扇に譬へたるを以て、末廣といひて文をあやなしたるなり○火の光ま映して云々　火の光に映して、即、うつりかゞやきて、滿天紅色なる中にゝ○風に堪へぞ吹き切られたる炎　風の力に抵抗してこらへ得ず、吹き切られたる火の火、即、燃え切のこと○うつゝごころあらんや　万葉集に現心とある意にて、さて現在この世にある心あらざりしな

らん、即、生きたる心地はせざりしならん、と長明かおしはかりいへるなり。

或は烟にむせびて、たふれふし。或は炎よまくれて、たちまちよ死ぬ。あるは又、わづかよ身一つ、からくしてのがれたれども、資財を取出つるゐ及むず。七珍萬寶さながら灰燼とかりにき。其費いくばくぞ。

○或は炎にまくれて云々　炎よまくれては、炎よまくられてといふ意○からくして　辛勞して、即、幸じてゑ○七珍万寶云々　佛書よ、寶有二一百二十種一、王寶七種云々とあり、この七種、即、七珍也、そゐ金、銀、瑠璃、車渠（車渠ゐ貝類にて、殼甚厚く、内の色は白く光り、外の色は、微褐色にして、切り磨れは、白玉の如くして、細かき文理あり飾とも）瑪瑙、珊瑚、琥珀をいふ、されどこゝにては、たゞ、數かぎりもなき珍らしき寶ともといふこと〈さながら　然ありながらの意にて、そのまゝ、または、悉皆なといふに同じ〉灰燼　說文に、灰ゐ死火餘燼也、左傳の注に、燼は火之餘木也とあり、即、火のもえきれの事なり。

此たび公卿の家十六燒げたり。まして其外はかずを知らず。をべて都の中、五分が一よ及べりとぞ。男女死ぬる者數千人、馬牛の類、邊際を知らず。人のいとおみ皆おろかなる中よ、さしも危ふき京中の家を作るとて、寶と費やし心をなやます事は、すぐれてあぢきなくぞ侍るべき」

○公卿　攝政、関白、太政大臣、左大臣、右大臣、内大臣を公といひ。大納言、中納言、三位以上を卿といふ。參議ゐ四位たりとも亦これよ入る○邊際をしらず　邊際はガキリといふ意、即、數かきりをしらずといふこと○人のいとなみ皆、おろかなる云々　こゝは長明が、佛說によりて意見を述べたるものよて、其論旨は、人命は朝の露の如くなるを知らず、人皆、名聞利譽に走て、百年の經營を爲ずこと愚な

る中に、然も危き無常なる京中の家を作るとて、賢を費し心を惱して、片時も歸家穩座をすることなきは、殊よ勝れて味氣なき、つまらぬ事にそ候ふべきとゝ〳〵さしも然〔し〕もよて、しゐ助辭ゝ〳〵あぢきなき　食物などの味氣なきなどいおも同意にて、あまきもの、からきものなどの、そのからき、あまき味なきときは、つまらぬものゝ、されゐ、あちきなきといふ言葉は、無益なる、つまらぬなどの意となる〳〵侍る　這へりといふ詞の、音便にはんべると濁れるを、更に約めたるなりその意は貴人の側に蹲踞、即、突這ひ伺候をる狀をいへる語にて、それより轉して、在り居りなどいふ語の敬語として、中古普く用ゐられたる文語ゝ、今文にていゐ候ふなどゝかくべきところなり。

又治承四年、卯月廿九日のおろ、中御門京極の程より、大なる辻風おこりて、六條ほたりまでいかめしくふきける事侍りき。三四町をかけて吹きまはるまゝに、その中にあるもれる家ども、大

きなるもちひさきも一つとしてやぶれさるはなし。さながらひらにたふれたるもあり。けた柱ばかり殘れるもあり。また門のうへを吹きいおちて、四五町か外におき、また垣を吹きはらひて、隣とひとつゐなせり。いはんや、家のうちのたから、數をつくして空ゐあがり、檜皮葺板の類冬の木の葉の風に亂るゝがごとし。塵を烟の如く、ふきたてたれむ、をべて目も見えず。おびたゞしく鳴りとよむ音に、ものいふ聲もきおえず。彼の地獄の業風なりともかばかりにはとぞおぼゆる。

○治承四年云々　治承四年は、前の大火ありたる安元三年より、三年目ゝ〳〵卯月卯の花月の略ゝ、陰暦四月の稱○中御門京極　縱通京極、横通り中御門ゝ○辻風　つむじ風なり、旋風ともいひて、旋りて渦を成して吹く風○六條わたり　六

條邊といふこと、あたりは、あたりといふに同じ○いかめしくふきける　嚴しく即、猛烈に吹きける〻○けたはしら云々　けたは方の意にて、家、橋などの外廻の柱の上に亘す材をいふ○いねんや家のうちのたから云々　家屋門墻など吹き倒さるゝことなれば、況や勿論家内の寶物などは、數を盡して悉皆空に上り、冬の木の葉の風に亂るゝが如しと〻△檜皮葺板　檜の小方板、今も殿社などの屋根に厚さ數分なるを、密に重ねて葺きたるあり○おびたゞしく鳴りとよむ　甚しく鳴り響く〻○地獄　地下の獄の義、佛説に、冥土なる六界の一、亡者の苛責を受くる處、等活、黑繩、合會、叫喚、大叫喚、焦熱、大焦熱、阿鼻、の八大地獄ありと云。梵語にこれを奈落といふ○業風　業を受けたる風といふことなり、抑業といふことは、佛教の語にて、因緣、因果、因業などいひ、人事の成立は、皆、因あり、緣ありて、果に至ること、豫め定まれりとして、然してこれを行ふことを、業といふ、即、因果の風などいふ意にあたる○かかばりにはとそおぼゆる　かばかりは、斯くばかりといふことにて、斯くおそろしき程度には、あるまじとぞ覺ゆると〻。とその上に、あるまじなどといふ語を省けるなり。

家の損亡するのみならず。是をとりつくろふまに、身をうおひて、かたはづけるひと數をしらず。此風、ひつじさるのかたに移り行きて、おそくの人のなげきをなせり。辻風は、つねに吹くものなれど、かゝる事やいあるべき。たゞおとにあらざ。さるべきものゝさとしかなとぞうたがひ侍りし」

○是をとりつくろふまに　家のやぶれむとするを、取繕ひ直す間になり○かたはづけるひと云〻　身に負傷して、不具となりたる人多くして、其數知られぬと〻○此風ひつじさるのかたに移り行きて　此風西南の方に移り行きて〻○かゝる事やはある　斯くある事あるべきや、斯の如き大變災はあまり見聞せざる

事なりとゝ、やはは、反語なれば、かゝる事はなきことありといふ意まなるなり

○たゝことゝにあらそ　たゝことゝは、徒言、即、只一通り通常の事にあらぞとゝ○さるべきものゝ云ゝ　然るべきものゝ諭、即、神戒の爲にてもあるかな、と疑念を生じ候ひきとゝ（さるべきものゝさとし云ゝにつきては參考の處を見よ）〔參考〕

平家物語に（さる程に、同じき五月十二日の午の刻ばかり、京中に飄風夥しく吹きて、人屋多く轉倒そ、風ハ中御門京極より起りて、坤の方へ吹き行くゝ、棟門、平門吹きぬきて、四五町十町バかり吹きもて行き、桁、長押、柱などハ虛空に散在し、檜皮葺板の類は、冬の木の葉の風に亂るゝか如し。夥しく鳴りとよむ音は、彼地獄の業風なりとも、是にハ過ぎしと見えし、只舍屋の破損そるのみならぞ、命を失ふもの多し、牛馬の類數を知らぞ打ち殺さる、是徒事にあらぞ、御トあるべしとて、神祇官にして御トあり、今百日の中に、祿を重そる大臣のつゝしみ、列しては天下の大事、佛法、王法共に傾き、並に、兵革相續そべしとぞ、神祇官、陰陽寮共に

うらなひ奉る）とあり。此頃王政衰へて清盛權を擅にし、佛法亂れて山僧神輿を弄せしなどの事ありしより、災異は神戒なりと人々思ひあへるなり。

又同じ年の六月の比、にはかに都遷侍りき。いとおもひの外なりし事なり。大かたこの京のはじめを聞けば、嵯峨天皇の御時、都とさだまりにけるより後、をでに數百歳を經たり。ことなる故なくて、たやすく改まるべくもあらねむ、これを世の人、たやすからず愁へあへるさま、ことわりにも過ぎたり。

○同じ年云々　同じ年とは、治承四年をいふ。此年六月俄ま遷都の事になりたるは、甚禁外の事なりきとゝ。平家物語（第五）に云、治承四年六月三日の日、福原（攝津國）へ御幸なるべしと聞ゆ。これ日頃、都うつりあるへしと聞えしかども、忽に今明の程とハ思はざりしものをとて、京中上下騒ぎあへりとあり△六月　水之月の義まて、早苗月に對し、田毎ま水を湛ふるよりいふ○大かたこの京のはし

め云々　この京ハ現今の京都にて、當初平安の都といひたりき。さてその平安の都ハ、桓武天皇の創立し給へるものなり。ちかるを本文に、嵯峨天皇の御時定りにけるとあるは違へり。こは嵯峨天皇(桓武天皇の御子)の御代に、皇城諸門など、備飾全備せしよりいへるならん。平家物語(第五)よも、桓武天皇の御宇、延暦三年十月三日の日、奈良の京春日の里より、山城國長岡に遷り(中略)延暦十三年十一月廿一日、長岡の京より此京へ(山城國葛野郡平安の都)遷されて、帝王は三十二代、星霜は三百八十餘歳の春秋を送り迎ふ云々、とあるよりて知るなるべし○ことなる故になくて云々　この平安城ハ、右の如く數百歳も打つづきたる帝都なれば、特別の事故なくては、容易よ變改あるべくもあらぜ、それを清盛の擅横によりて、遷都の事よなりたれバ、當時の中の人容易ならざる事へと愁へ合へる事、誠に道理至極なり、と長明が評論したるなり。平家物語よ、此京をハ平安城と名づけ、たひらやそき都とかけり。尤平家の崇むべき都ぞかし。桓武天皇と申は、平家の曩祖にてれはおまそ。先祖の君のさしも執し思し呂しつる都を、させる故なうして、他國他所へ遷されけるこそ、あさましけれ。一年嵯峨皇帝の御時、平城の先帝、尚侍のそくめよりて、既に此京を他國よ遷さんとせさせ給ひしかども、大臣公卿諸國の人民、背き申しくかば遷されぜして止みにき。一天万乘のあるじさへ、遷し得給はぬ都を、入道相國人臣の身として、遷されけるぞあさましきとあり〔參考〕遷都の理由　平家物語(第五)に云、抑今度都うつりの本意をいかよといふよ、舊都は山(比叡山をいふ)奈良(興福寺東大寺をいふ)近くして、日吉神輿、春日神木などいひて猥りがはし、新都ハ山隔り江重りて、程もさそか遠ければ、さやうの事も容易かるまじとて、入道相國計ひ申されけるとかや、といへるによれは、清盛も坊主の恐迫に困み遷都を思ひつきたるものか。

△されぞ、とかくいふかひなくて、御門よりはじめたてまつりて、大臣、公卿ことごとく、攝津の國難波の京に移り給ひぬ。世につかふる程の人、誰かひとり古郷よ歸り居らむ。官位におもひを

かけ、主君の影をたのむほどの人は、一日なりとも、とく移らむとはげみあへり。時を失ひ、世にあまされて、期する所なきものは、愁へながらとまりをり。

○されどとかくいふかひなくて云々　愁へ合へるは道理至極なれど、然れどとかく彼是いふも其甲斐なくて、當時の御門、即、安德天皇を始め奉り、大臣公卿遂に攝津國、難波京、即、福原へうつり給ひきと〻。福原は現今の兵庫築島なりといふ○世につかふる程の人　君に仕事そる分際の人、即、官人い勿論古郷の平安城にい殘り居らを。又今より官位を志願して、主君の御蔭を蒙らんと希望そる分際の人は、いづれも一日も早く新都に移らん、と勵み合へりと〻○時を失ひ云々時機を失ひ世ま用ゐられぎして、殘されて官につくべき時期の望みなきものは、心ならぎ愁へながら平安城まとゝまり居るとゝ。

軒をあらそひし人のすまゐ、日を理つゝ荒れゆく。家はこぼたれて、淀川まうかび、地は目れまへま畠となる。人の心みなあらたまりて、たゞ馬鞍をのみおもくす。牛車を用とする人なき。西南海の所領をねがひ、東北國れ莊園をば好まず。

○軒をあらそひし云々　軒を並べ、豪奢を競爭せし人の住居も、日々に荒れゆくとゝ○家はこぼたれて云々　家々は毀たれ、即、こはされて、淀川に入れられて、筏に組みうかべられ、福原へ運びくださるゝをいふ△淀川は山城にあり、源い宇治川より出てゝ、伏見を經て難波の海に入る○人の心みなあらたまり云々　こは世の變動に逢ひて、人心もまた改まれるをいふ○馬鞍をのみ云々　馬鞍い當時武家の乘用として用ゐたるもの、牛馬は公家の乘用したるもの、ここの文意は人心一變して武士を重んじ公家を輕んじたる有樣をいへるゝ○西南海の所領云々　朝廷より所領を賜はるにも、人々西南の地方を望みて、東北國の地方をば好まぎとゝ。東北國を忌避そる所由い、新都に不便多ければゝ△莊園とは中世

朝廷より、國々の田園を褒賞などに、皇子諸臣等に賜はりし領地をいふ。されど後ゝは私に開墾し、或は他を無弁し強奪せるもの多し。こゝにてはたゞ領地といふことにて、上の所領といふゝ同じ。

其時、おのづから事のたよりありて、攝津、國の今の京ゝいたれり。所のありさまを見るゝ、其地ほどせせむくて、條里をわるゝ足らず。北は山にそひてたかく、南は海に近くて下れり。波の音つねにかまびすしく、汐風こそにはげし、内裏は山の中なれば、かの木丸殿もかくやと、なの〳〵やうかはりて優なるかたも侍りき。

○其時おのづから云々　此遷都の際、長明自然用事ありて、福原の新都に到れりとゝ○其地ほどせせばく云々　福原の地ハ、程度狹く、東西南北の區域を割り當つるに不足なりとゝ△條里　拾芥抄に、條起」從」北行二於南一里、起」從」西行二於東一三十六町爲二一里一六里爲條、とあるにてしるべし。こゝハたゞ四方の區域、又ハ市區などいふことに當る。（參考）平家物語ゝ同じき（治承四年）六月九日の日、宮城の地を割られけるに、一條より下五條までは、其所ありてそれより下はなかりけりとあり。平安城は一條より九條までありて、東西に町を爲たるに、新都の地ハかゝることなれば、せまきこと知るべし○内裏　大内裏の中にて、別ゝ天子の住まはせらるゝ一區の宮殿ある處、大内、禁中、禁裏、禁闕などいふも皆同じ○木殿丸も云々　むかし質撲を以て有名なる木丸殿も、福原の内裏に似て、斯くの如くやありつらむと、思ひ合せて見れば、中々平安城とは其樣變りて、無風流の處又風流とて、優にまさりたるかたもありと、長明が嘲弄して評論せしなり△木丸殿　十訓抄云天智天皇（天智天皇皇太子の時の事ゝて、齊明天皇に從ひ、筑紫に幸し、百濟を救ひ玉へる時ゝ。齊明天皇は、この朝倉の行宮ゝて崩じ給へり。下ゝ世につゝしみ給ふ事とあるは、この崩御をいへるならむ）世ゝつゝしみ給事ありて、筑前國上座郡朝倉といふ所の山中に、黑木の屋を造りておいしけるを、木丸殿と云、

圓木よて造故也。今大嘗會の時、黒木の屋とて、北野の齋場所よつくる敍の時の例なり。民を煩はさぞ。宮造も儉約なるべきといふ由なりとなり。

日々にこぼちて、川もせきあへず、はおびくだを家は、いづくよ作れるよかあらむ。猶むなしき地い多く、造れる屋いすくなし。古郷い既にあれて。新都いいまだならず。ありとしある人、みな浮雲の思をおせり。

○日々にこぼちて云々　毎日崩し、毀ちて運び下そが爲めよ、その材木家財の淀川に滿ちて、川を支へ得ざる程なりしよ、それらは何處に建築されしか、新都を見れば猶(やはり)空地のを多くして、造家はそくなしとゝ△せきあへぞ　せきい、四段活用の詞にて、せか、せき、せく、せけ、となる、このせくといふ語原い、閉くよて閉ち塞く意あれば、せきあへずは、塞き得そ、即、支へ得そといふこと○古郷は既よあれて云々　古今は平安城をさし、新都は福原をさす〔參考〕平家物語第五舊き都の荒れゆくを今樣にてそうたいれけれ(後德大寺實定か作)

舊きみやこを来て見れは　淺茅が原とそあれにける
月のひかりはくまなくて　秋風のみぞ身にいたむ

とあるはこの時のことなり○ありとしある人　ありとある人、即、あらゆる人といふこと、しは物辭なり○みな浮雲の思ひをなせり　世人皆心うきて落ち付かぞとゝ。浮雲の如き思ひとい、浮雲は風に從ひ漂ひて、身に定りなき心をいふ。

もとより、此の所ゐ居れるものは、地をうしなひし愁、今うつる住む人い、土木の煩ある事を歎く。道の邊を見れば、車にのるべきい馬にのる。衣冠布衣なるべきは直垂をれゐり。都のてぶりたちまちに改まりて、たぐひなびたる武士にあをならず。

○もとより此所に云々　從前より此處、即、福原に土着の人も、舊都の人とも多く移り来りたるが爲めよ、所有地を失ひて愁へ、今度移り住まむとぞる新入の人

も、建築などの煩累ある事を歎息せとゝ△土木　土は垣、木は屋の意にて、即、建築のことなり○車にのるべきゝ云々　此は上に馬鞍をのみ重くし、牛車を用とする人なし、といふ文に照應せ、即、公家風の乘物が武家の風に變りたるをいふ○衣冠布衣なるべきゝ云々　此は衣服まで公家風が、武家風ゝ變りたるをいふ△衣冠　冠と袍（袍とは表衣の稱、綾にて種々の織文あり、盤領にて長さ股膝に至る）とに指貫（袴の一種、裾を糸にて指貫きて、足に据りつく、平絹或は織物なり）を着くこと、即、正裝のこと△布衣　服の稱、盤領ゝて、袖括りあり、裾を袴の外へ出して着る、帶にて腰を鈎め、袴は指貫を用ゐる△直垂　古へ庶人の服、後に禮服となる。紗、生絹、精好等にて作り方領にて文なし、袖括りあり、胸紐の菊綴皆組緒なり、裾は袴の内に入り、袴は踝に至る。地色の文は衣袴共ゝ同じ○都のてぶり云々　都の風忽に改新して、たゞ鄙風、即、田舍武士の有樣になれりとゝ。

是い、世の亂るゝ瑞相とか、聞きおけるもしるく、日を經つゝ世の中うき立ちて人の心もをさまらぎ。民の愁へつひにむなしからざりければ、同年の冬、おほ此京に還り給ひゝき。されどこぼちわたせりし家どもは、いかになりゝけるか、悉くもとのやうゝもつくらず。

○是は世の亂るゝ瑞相云々　かやうなる變動ゝ、世の亂るゝ前兆なりとかいふことを、かねて聞き居たる事もありしが、果して著く明白ゝ頃れ出て、日を經過しつゝ行くゝ從ひて、愈世の人心動揺して治らぎとゝ△瑞相は吉兆などいふ義なれど、ここゝては、たゞ前兆などいふ意○民の愁へつひにむなしからぎ云々天下一般に今度の遷都を歎きたれば、其愁心遂に空しからぎ、貫徹して、同年の冬猶（やゝり）もとの平安城に還ることゝなりにきとゝ（參考）平家物語ゝ、今度の都うつりをば、君も臣も斜ならぎ御歎ありけり。山、奈良をはじめて、諸寺諸社にいたるまで、然るべからざる由、新へ申したりければ、さしも横を破紙られし（横道なる）太政入道殿、さらば、都かへりあるべしとて、同しき十二月二日の日、俄

に都かへりあり○されどこほちあたせりし云々　平安城にかへることゝなりしが、然れども既に毀ちて搬運せし家どもは、遂にいかになりはてけるか、建築などもとのやうにもつくらぜとゝ。

ほのかに傳へ聞くに、いにしへのかしこき御代には、憐みをもて國を治め給ふ、則御殿に茅をふきて、軒をだにもとゝのへざ煙のともしさを見たもふときは、かぎりあるみつぎ物をさへ、ゆるされき。これ民を惠み。世をたすけ給ふによりてなり。今の世の中のありさま、むかしになぞらへて知りぬべし」

○ほのかに傳へ聞くに　ほのかとは、かすか、ほんのりなどいふと同し、見ゆて分明ならぬ狀をいふ語。漢字の仄、側などにあたる○いにしへのかしこき御代には云々古の聖王明主の御代に、憐を以て國を治め給ふそのときには、内裏・御殿の屋根の、茅ぶきにしたるその軒の差出たる、不揃の處をだに調のへ結ハすとゝ。

こは質撲節儉を主とし無益の脩飾に力を費し給はぬゝ、即、茅茨不剪務從節儉一の意ゝ〈則ハその如くなるときは、又は然るときハなどの意〈軒は延木の意にて、屋根の椽の四方へ垂りて差出たる處〈だには唯などの意、即、唯にいさゝかのこの位の事までも、注意し給へる意をあらはせる辭ゝ○烟のとぼしきを見給ふときハ云々　仁德天皇高臺に登らせ給ひて、民家の烟のまれなるを見させ給ひて、三年間みつぎ物を免除し給へることをいふ民家富めは炊烟盛に起り。しからざれはまれに反る。仁德天皇紀に、四年二月群臣に詔して曰、朕高臺に登り遠望るに、烟氣起らず、蓋百姓窮乏するならん、朕聞く古聖王の世ハ、人給き家々足り、頌歌して相樂むと、今朕億兆を望むこと三年、頌聲作らず炊烟日に疎なり、乃ち知る五穀登らず、百姓日に窮せることを、畿内猶然り況んや畿外諸國をや、三月詔して曰く、自今以後三年、悉く課役を除き、百姓の苦を息へ、黼黻鞋履弊れ盡きぬれは爲らず、温飯暖羹酸餡せざれは易へず、心を小ハして志を約し、以て無爲に從事せんとあり。これらをいへるなり〈かをりあるみづき　かをり

あるとい、定めおかれし、即、定限し給へるといふ意、みつきは御調の義、つぎは供給の意、即、御つぎは人民より官に奉る租税の泛稱△さへは添へ、或い、其上、などの義にて、物の上ま物の添ひ加いる意なり、即御倹約ありて民をめくみ給ふは勿論、其上に定まりある皇室の供給物を添へて、免除し給ふとゝ　○今の世の中のありさま云々　右の如き吉の聖代の時と、今の世の中の有様とを比較して、その得失を知るべしとゝ。

又養和の頃かゝよ。久ゝくなりて、たしのにもおゞえず。二年が間、世の中飢渇して、淺ましき事侍りき。或い春夏ひでり、或は秋冬大風大水なゞ、よからぬ事ども打つゞきて、五穀おとゝくみのらず。空しく春耕し、夏植るいとなみのみありて、秋刈り、冬収るそめきはなし。

○又養和の頃かとよ云々　安德天皇の御代、即、養和といふ年の頃歟、程歴て久

しくなりたれば、其年代い長明髄に覺ぬゝとゝ。是は養和元年同二年にありたる事、下の平家物語の文にて明らかなり參考ゝべし。○二年が間世の中飢渇して云々二年間天下凶年にて、意外の恐ろしき事ありきとゝ。△飢渇とは、凶年、飢饉なとの意。前漢書に(「穀不」熟爲」飢」。菜不」熟爲」饉」)とあり。渇は、字彙に(「口乾欲」飲之義也」)とあり。飲料の乏しき意。△あさましき事とは、意外の事、即、恐ろしき事の意○春夏ひでり　ひでりい、旱なり。說文に(「旱不」雨也」)とあり○五穀　米、麥、粟、黍、豆の五種の稱なれゞ、てゝはたゞ穀類の總稱ゝ○空しく春耕し云々　春耕作し、夏植付ゝる經營も、徒勞に屬して、登らされば、秋稻を刈りて、冬收納ゝる騷ざもなしとゝ、△そめきとは、そよ〳〵とさゞめくこと、即、農夫なゞ收納の時にいそがしく騷ぎ立つこゝなり。

是によりて、國々の民、或は地をすてゝ、堺をいで、或い家を忘れて、山に住ゝ。樣々の御祈はじまり、なべてならぬ法ども行

いるれども、さらにそのしるしなし。京のならひ、なにわざにつけても、みなもとい、田舍をてそたのえるゆ、絶えてのぼるものなければ、さのみやみさをも作りあへむ。

○是によりて云々　かくの如き飢饉によりて、生活しかねて、國民各自その所有地を捨てゝ、國境外に出て他國に流浪し。或い家を捨てゝ山間に入りて、露命をつなぐもありとゝ。凶年飢歲君之民、老弱轉二於溝壑、壯者散之二四方一者幾千人、と孟子がいへるあまに似たり○樣々の御祈はじまり云々　朝廷にても、種々樣々の年直しの御祈禱を始め給ひて、一方ならぬ御修法（佛事）など行はせられたれども、さらにその効驗なしとゝ○京のならひなにわざにつけても云々　全体京都の風い、何事に付ても、其繁昌の根據は、地方の物品に依頼するものなるに、天下中飢饉よて、地方も衰微したれば、打絶えて人も物も、出京するものなければ、隨て都も衰へたれば、都人も斯くては、黙して耳いつまでも、長くは節操も守りきれ

ぞとゝ△さのみやみさをも作りあへむのやい反語にて、さのみみさをも作りあへむや、敢て操も作りきれぞといふことになる△みさを　節操。曲禮曰（君子雖貧不二粥一祭器、雖二寒不一衣二祭服一）これらの操の守りきれぬをいふこと、下文にて知るべし△あへむ　あへは敢の義にて、堪へ遂くる意。（むは助動詞）なれど、こゝには、上にやといふ反語あるによりて、反對の意味となる。

念じ佗びつゝ、樣々の寶もの、かたはしより捨るがごとくすれども、さらに目みたつる人もなし。たま〳〵かふるものい、金いのろくして、粟をもくす。乞食道のべにおほく愁ひかなしぶ聲耳ゆみてり。

○念じ佗びつゝ云々　飢饉にせめられ、爲んかたなく、即、思棄にくれて、節操も守りがたく、家の重寶をも、片端より捨るが如く賣却せんとすれども、更ゆ目をつけて見立て、買ふ人もなしとゝ○たま〳〵かふるものは云々　たま〳〵、稀に

交換する人あるも、金錢は輕ろんぜられ、穀物は重んぜられて、金を所持する人頗る不利益なりとゝ〈〈　はてゝにては米穀のことをいふ。

前の年、かくのごとく、からくして暮れぬ。明る年は、たちなほるべきかと思ふ程に、あまさへえやみ打そひて、まさる樣に跡かたなし。世の人みな飢死にければ、日を經つゝさはまり行くさま、少水の魚のたとへにかなへり。

○前の年かくの如く云々　前のとしは、養和元年へ。からくしては、辛してゝ、即養和元年は、辛して、先、ヤツトの事で暮れたりとゝ○あまさへえやみ云々　翌年即、養和二年には、剩さへ飢饉の其上に疫病までも打加りて、前年よりも凶事は一層まされるやうにて、神佛に御祈ありしも、其効驗更に見えぬとゝ〈〈あまさへは、餘りさへの義、即、其上なほゝ、いふ意となる（參考）平家物語に（養和二年四月廿日、二十二社へ官幣を奉ちる、これ飢饉疾疫によりてなり）とある。この時のことならん○日を經つゝきはまりゆくさま云々　日を經過するに從ひて、いよ〳〵窮乏の極度に落ちゆく有樣は、少水の魚の日々に水の減して、死に近つくに似たりとゝ。往生要集に（是日既過、命則衰滅、如少水之魚）といふ詞を引用したるなり。

はてには、笠うちき、足ひたつゝみ、よろしき姿したる者、ひたすら家ごとに乞ひありく。かくびゝれたるもろぐも、ありくかと見れば、則ちたふれふしぬ。ついひちのつち、路の頭に、飢死ぬる類ひいかぞもしらぬ。とりをつるわざもなければ、くさ〻の香、世界にみちゝて、變りゆくかたち有さま、目もあてられぬ事おほかり。いはむや、川原などには、馬車の行きちがふ道だにもなし。

○はてには笠うちき云々　こゝは身分のいやしからぬ人までも、飢饉のために乞食をするさまをいへるなり。即、遂にハ人目を恥ぢて、笠うち被りて顔をかくし、衣服などにはさほど不足なければ、足などはつゝみかくして、身なりもよろしき姿の人まで、專ら人の門前に立ちて、食を乞ひありくとゝ○かくわびしれたるものども云々　斯の如く、飢饉ゑ苦しみ氣拔けしたるものども、衰弱のあまり、歩くかと見れば、忽ち倒れ臥しぬとゝ△わびしれ　わびとは、難澁をすること、即、苦しむこと。しれとは痴の義にて、心の愚ゑなること、即、氣拔のをすること○ついひぢのつら、築土の面の義にて、土塀の表面をいふ○變りゆくかたち有さま　盛なる場所も衰へ、老若ともに倒死をする有樣、實に見るに忍びざる事多く有りとゝ○いはむや川原などに云々　市中をら斯の如し。況むや加茂川原などハ、なほの事にて死屍充滿して、馬車の通行をべき道だにもなしとゝ。

あやしきしづ山がつも、力つきて、薪さへともしくなりゆけば、たのむかたなき人ハ、みづから家をこぼちて、市に出でてこれ

をうるゑ、一人が持て出たるあたひ、なほ一日が命をさゝふるだに及ばずとぞ。

○あやしき賤づ山がつも云々　奇異なる賤の山人も、飢餓のために京へ薪を持出をことともなければ、薪も乏しくなりゆきたりとゝ△あやしきしづ山がつとハ、山方に住む樵夫、仙人などいふ賤民の稱。山方の賤民は、通常の人より、奇異なる風体なれば。あやしきといふ形容詞を付したるなり○たのむかたなき人　依頼をべき身よりもなき人ゝ○一人が持て出たるあたひ云々　家を破りて、其材木を市ゑ荷ひ行きて賣るに、一人ゑて持ちゆきたる材木の代價にては、一日の命をつなぎ支ふるに不足なりとゝ。これ金はかろくして、粟をおもくを、と上にいへる事實なり△こゝゑとぞといふ辭にて、文を結びたるは、下にいふと云ふ動詞を略きたるゝ。

あやしき事は、かゝる薪の中に、丹つき、白金黄金のはくなぞ、

所々ふつきてみゆる木のこれ、あひまじれり。是を尋ぬるに、をべき方なきものゝ、古寺に至りて佛をぬすみ、堂の物の具をやぶりとりて、わりくだけるなりけり。濁惡の世ゆゑも生れあひて、かゝる心うきまざをなむ見侍りし。

○あやしき事はかゝる薪の中に云々　奇怪なる事は、薪の中に赤色つきたるもの、或は銀箔、金箔などの所々につきて見ゆる木片、相交りたりとゝ△丹は古への繪具、赤色のもの、丹は假字にて、語原は、赤土といふ詞に起れりといふ○是を尋ぬれば、をべき方なきものゝ云々　其奇怪なる事實の次第を詮索をれば、飢饉にせめられて爲ん方なきものゝ、古寺に入りて佛像をぬをみ、或は、堂舍の道具などをぬをみ取りて、破り碎きたるものなりけりとゝ。けりは、過去をあらはを助動詞にて、かねて嘆息の意をあらはしたるなり○濁惡の世にも生れあひて云々　濁惡の世とは、汚濁の惡世といふ意。即、長明、不幸にも、かゝる濁惡の世

に生れあひて、佛像佛具などを破り取るなどの、心憂き所業を見候きとゝ△濁惡　觀無量壽經疏云(濁者五濁也、一見、二煩惱、三衆生、四命、五劫、惡十惡也、殺、盜、婬、妄語、惡口、兩舌、綺語、貪、瞋、邪見也とあり。

又いとあはれなる事も侍りき。さりがたき女男など持ちたる者は、その思ひまさりて、ふかきは、かならずさきだちて死ぬ。其故は、我身をむ次になして、男にもあれ、女にもあれ、いたはしく思ふかたに、たまゝ乞ひ得たる物を、先づ與づるよりてなり。されば親子あるものは、定まれるならひにて、親ぞ先立て死にける。

○さりがたき女男など持ちたる者は云々　避りがたく、捨てがたき女なり男なりあるものは、即、夫は妻を思ひ、妻は夫を思ふが如く、各其大切に思ふものを持ちたる者は、いづれなりとも、思ふ事の深き方が、對手の一方の人のために、さき

だちて死ぬ。其故は、己が身命を第二になして、男にても女にても、不便に思ふ對手方を第一にして、たま〳〵稀にをひ得たる食物を、其人にゆづり與ふるによりてなりとゝ〳〵いたはしは、可憐、又い、不便なをの意、いとほしといふも同し○されは親子あるものは云々　他人の間柄にても上の如くなれば、然れは、親子の情は猶厚きものなれば、親子ともに存在をるものは、常の事にて親の方、子に先立て死にきとゝ。是は親子は互に相思ふは、定れる習慣なれど、親の子を思ふは、子の親を思ふ心より一層切なれば、親がをひ得たる食物をば、子に與へてその親は食せざるによりてなり。

又母が命盡きてふせるをしらずして、いとけなき子の、その乳房にすひつきつゝふせるなどもありけり。仁和寺に、隆曉法印といふ人、かくしつゝ數もしらず死ぬることを悲みて、ひじりをあまたたらひつゝ、その首のみゆるごとに、額に阿の字を

書きて緣を結ばしむるわざをなむせられける。

○又母か命盡きて云々　上に云へる如く、いとあはれなる事あり、またこゝにいふが如き、あはれなる事も候き。そは母親なる人飢て死に伏したるを知らぜして稚子の、その母の乳房に吸ひ付きつゝ、伏居るもありけりとゝ○仁和寺　山城國葛野郡にあり○隆曉法印は、源俊隆の子なり○かくしつゝ數もしらぜ云々　斯の如く無數の人の死ぬるを悲しみてゝ○ひじりをあまたたらひつゝ云々　ひじりとは、聖の字の意、即、數多の聖僧と相談して、死人の首の見當り次第に、其額に阿彌陀佛の阿の字を記し付けて、結緣の業を爲られたりとゝ○緣を結ふとは、佛道に引導をることゝ。

その人數をしらむとて、四五兩月がほどかぞへたりければ、京の中、一條よりは南、九條より北、京極よりは西、朱雀よりい東、みちの邊にある頭をべて四万二千三百餘ありける。況む

や、その前後ゐ死ぬるものも多く、川原、白川、西の京もろ〳〵の邊地などをくはへていはば、際限もあるべからず。いかにいはむや、諸國七道をや。

○一條より南九條より北とは　一條より南の方九條まで、また九條より北一條までと、南北の分際を、双方よりくり返しいへるなり○京極より西朱雀より東と京極より西の方朱雀まで、朱雀より東の方京極までと、東西の分際を、双方よりいへるなり　拾芥抄に(從二一條一南至二于九條一并三十八町、從二朱雀一至二于京極一十六町とあり○川原白川西の京云々　河原ハ、山城國愛宕郡東川原ゑ。白川も同愛宕郡にあり△西の京　昔ハ、京都を二つゑ分け、朱雀大路といふを中央とし、左を左京とし、右を右京とせり。即、この右京を西の京といへり。上に、川原、白川を擧けて、京の東の方をいひ、こゝに、西の京をあけて、京の西の方をいへり○もろ〳〵の邊地　京都内の諸邊鄙の地ゑ○いかゑいはむや諸國七道をや　況や、幾

内諸國、七道總体を云はゞ、實に數限りなき事ならむ如何とゑ△いかには副詞にて、如何にあらむ、サヅカシと推量して問ふ詞ゑ△幾内諸國とは、山城、大和、河内、和泉、攝津、七道は、東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海をいふ。

近くは崇德院の御位のとき、長承のころのとよ。かゝるためしはありけりと聞けど、その世のありさまいしらず。まれあたりいとめづらかにかなしかりしことなり。

○近くハ崇德院の御位のとき云々　近くハ、崇德天皇の長承の頃かと覺ゆるが、(長承三年に、諸國大洪水、洛中火災ありし事舊記にあり)其時、大凶荒ありて、斯の如き人死の例ハありけりと聞けど、その世の有樣は、長明覺知せぞ(長明の生前二十年ばかり昔のことなり)今回の災異は、目前に見て、實に非常に悲しかりしことなりとゑ△めづらかとハ、愛る意、即、世に稀にして、愛をべくあるといふ義より、轉じて非常といふ意となる。

また元暦二年のころ、大なゐふること侍りき。そのさまよのつねならず。山はくづれて、川をうづみ、海はかたふきて、陸をひたせり。土さけて、水ほとばしりあがり、巖われて、谷にまろび入る。渚おぐ船は、波に漂ひ、道行く駒は、足の立ちどをまどはせり。いはんや、都のほとりゐ、在々所々、堂舎、塔廟、ひとつとしてまたからぢ。或いくづれ、或いたふれぬる間、塵灰たち上りて、盛なる烟のごとし。

○元暦二年のころ大なゐふること侍りき　元暦い、後鳥羽天皇の御代の年號なり△大なゐい大地震（鳴佐の義なりといふ）といふことの古言△ふるい震るよて動揺をることと（參考）東鑑に、元暦二年、七月九日、午刻、京都大地震、得長壽院、蓮花王院、最勝光院以下佛閣、或顛倒、或破損、亦閑院御殿棟析、金殿以下屋少々顛倒

占文所推其慎不輕云々、とあるこれなり○よのつねならず　世間尋常のものにあらず、即、非常の地震なりとゑ○巖われて谷にまろび入る　巖破れて谷に轉び入るゑまろびい俗ヨコロガルといふに同じ○渚こく云々　渚は（波際淺の約なりといふ）水陸の界にて、波の打寄るところ、即、波うちきいをいふなれど、こゝはたゞ水上といふ意ゑ△波にたゞよひは、波の爲めに漂ひ動きて、止まらざるをいふ△足の立ちどをまどはせりとは、足の立處、即、立脚の地動揺して、馬の迷惑せるなり○いはんや都のほとりには云々　片田舍さら斯の如くなれば、況んや都の邊い、一として全からぢ、そこなはれざるいなきとなり△在々所々　在所在所といふに同じ、あらゆる所、いづこもの意△堂舍塔廟　堂舍は佛像を祀る所なり。塔い佛骨を安置せる所、廟い先祖を祭るれる所、こゝにてい神社佛閣あるいふに同じ。

地の震ひ家のやぶるゝ音、雷にこそならず。屋の中ゝをれば、忽

ちに打ちひしげなむとを。はしり出れば。又地ゐれさく。羽なければ、空へもあがるべからず。龍ならねば、雲にものぼらむことかたし。恐れの中におそるべかりけるは、たゞ地震なりけりとぞ覺えはべりし。

○打ひしげなむとを　打拉かれ、即、緊と壓し潰されむとをその意。○恐れの中にれるべかりけるは云々　世の中には、風災、火災、其他恐るべきことゐ數多けれども、其のうちにて、最も恐るべきは地震なりとゑ。べかりけるはべくありけるゑ、クアの約かなれゐあり。たゞは是のみ、又、外にはなくなどの意。

それ中に、ある武士のひとり子の、六つ七つばかりにはべりしが、ついひちのおほひろ、下に小家をつくりて、はかなげなる跡なしごとをして、遊び侍りしが、俄ふくづれうゑられて、あとかたなくひらにうちひしがれて、二つの目など、一寸ばかりうちいださるを、父母かゝへて、聲も惜まずかなしみあひて、侍りしこそ、あはれにかなしく見侍りしか。子のかなしみまは、猛きものも恥をわをれけりとおぼえて、いとほしく理かなとぞ見侍りし。

○ろの中ま　この地震の慘狀、實にあはれなるその中にもの意。○ついひちのおほひの下　ついひちとは築墻のこと、その古代の作り方は、柱を立て板をそへて、泥土まて其間を填むるゑ、さて其頭上をい瓦にて葺きたりき、ゆゑま、おほひの下といふい、瓦にてふきたる部分、即、屋根をいふ。○はかなげなる跡なしごと　はかなげなるとい、取とめなき、あどけなき、あどけなきなとの意、跡なしことまいふも

また同じ、即、無心なる子供遊びせしなり○あとかたなくひらに云々　身體の影かたちもなきやうに、土墻の屋根の爲めに、平にうちひしぎ潰されたりとゝ△しかは過去助動詞きの變化、即、き、し、しかと活く辭まて、上のことといふ係辭を結ふゆゑまて、しかといひたるなり、清みてよむべし○子のかなしみには猛きもの云々　子のかなしみには、猛きもの、即、武士も恥外聞を、忘れて歎き悲しめるは、誠に道理ある尤なる事と思ひて、不便に感したりとゝ。

かくおびたゞしくふる事は、しばしまてやみにしかども、其餘波しむ〳〵絶えず。よのつねあふ驚くほどの地震、二三十度ふらぬ日いなし。十日、廿日、過きぬれしかば、やう〳〵間どほかりて、或は四五度、二三度、もしは一日まぜ、二三日に一度など、大かたそのなごり、三月ばかりや侍りけむ。四大種の中に、水、火、風い、つねに害をなせど、大地にいたりては、殊なる變をなさず。」

○其餘波　餘波は元来海邊の岩間などへ浪の打寄せて、引たる跡まで殘りたる浪の事まて、後には波のことならぬ他の物の上にても、其本體の失たる後に、いさゝかそのものゝ存在したるを云ふ言にて、こゝにてい震動の殘れるをいふ。名殘などゝ書くも同じ意なり○間とほにになりて、間遠まなりてにて、震動の遠ぬくこと○一日まぜ　まぜは、交の義まて、一日交替、即、一日置き、隔日などの意○四大種のうちに云々　四大種といふ、地、水、火、風をいふ。義楚六帖に、四大地水火風也、亦名大種以形相大能生万物也とあり○大地にいたりては云々　水災、火災、風災いつねに害をあせど、地上まはさほどの變異をなさゞ、されど地災、即、地震はこれと異なりて、大地に大變動をなせり、といふ餘意を含ませたるなり△變は字書に、固形而易謂之變、離形而變謂之化とあり。

むかし齊衡のころとかよ。大なゐふりて、東大寺の佛のみくし落ちなどして、いみじきことども侍りけれど、なほ此度よりしかすとぞ。則ち人みなあぢきなきことを述べて、いさゝか心のまどりもうすらぐかと見しほどよ、月日かさなり、年越えし後は、言の葉にかけて、いひ出る人だになし。

○齊衡ハ、文德天皇の御代の年號なり○東大寺の佛のみくし云々　東大寺ハ、南都（大和）七大寺の一、聖武天皇の創立し給へるものなり△佛のみくしハ佛像の御首也。文德實錄に、齊衡二年乙亥、五月庚午、東大寺奏言、毘盧那大佛頭、自落在」地云々、と即このことなり○いみじきことゝも云々　いみじきは甚じきの意にて、非常なるといふにおなじ△此度にはたかをとぞは、齊衡年度のものは、今回のもの、即元暦二年の地震には似ず（余程齊衡の地震ハ今回に比それはかろかりき）とぞいふとゝ○則ち人みなあぢきなきことを云々　上にいへる如き慘狀によりて、人々世の味氣無く、はかなきことをいひて、即無常に感じて、少しハ貪欲の念も薄らぐかと思ひありし間よ、月日を重ね、年を經過するまゝに、またもとの心になり行きて、當時の觀念などいひ出る人だになくなりよけりとゝ。

すべて世のありにくきこと、我身と栖とのはかなくあだなる樣、またかくのごとし。いはむや、所により、身のほどにしたがひて、心をなやますことハ、あげて數ふべからず。もしおのづから身叶はゞして、權門のかたはらよ居るものは、ふかく悅ぶことハあれども、樂しぶにあたハを。歎きあるときも、聲をあげて泣くことなし。進退やすからぬ、立居よつけて恐れをのゝくさま、たとへば雀の鷹の巢にちかづけるがごとし。

○そべて世のありにくきことと云々　こゝは安元の火災このかた、元暦の震災までを列擧して、世上の艱難の事實を示し、さて最初にはかなきものなり、と論及せし人と、そみ家との二つに結ひ、更にこれより一歩を進めて、身心を修むべき要道を說き起せり。大意はそべて人世の艱難なること、又身と住家と、はかなく、假空なること、またかくのごとしとゝ。またとい最初序論、に人と住家とのあたなることをとかれたれは、こゝにその事實を擧けて、またかくのごとしといへるなり

○いはむや云々　わか身とそみかとの轉變てはかなきはかくのごとし、まして此外は何人も、その身分〳〵に從かひて多少心をなやまそこと、數へつくすべくもあらぬとゝ○もしれの、づから身叶はぬして云々　もしも時世に適はぬ、世に用ゐられぬして、貴權の門防などに住居する時は、その愛顧を受けて、大に悅ふことはあれとも、遠慮そべきことも多く、從て心のまゝならねば、樂しむことは能はぬとゝ。こゝは、本朝文粹の、慶滋保胤か池亭記に、近勢家容微身者有樂本能大開口而笑有衰不能高揚聲而哭進退有懼心神不安、響猶鳥雀近鷹鸇矣、とあるによられたるなり△權門は、字書に、權ハ勢也とありて國家の要路にある勢力家をいふ△立居につけて恐れ、をのゝくとは、進退起居につけて懼れ震ふをいふ。

もし貧しくして、富る家の隣にをるものは、朝夕すがれ姿を恥ぢて、諂ひつゝ出で入り、妻子僮僕のうらやめるさまをみるにも、富る家の人のないがしろなるけしきを聞くにも、こゝろ念こゝろうちきて、どきとおそれやすからず。もしせばき地に居れば、近く炎上するとき、その害を遁ることなし。もし邊地にあれば、往反わづらひおほく、盜賊の難はないだし。

○朝夕そぼき姿を恥ちて云々　そぼき姿とは、俗に云、ミスボラシキ姿といふに同し。貧者はその見そぼちしき姿を恥づるまゝに、媚びへつらひ朝夕出入そとゝ

○妻子僮僕のうらやめるさまを見ても云々　貧者の妻子、僮僕なども、富者のいきほひあるを見て、うらやむ躰を見るにつけても、又は富者の家のものどもが、自然に貧者を輕蔑する形狀を聞くにつけても、即、見るもの聞くものにつけて、不平心其時に動き出して安からぬと云〇もしせはき地に居れい云々　市街の人家稠密ある狹隘の地に居れば、火難を免ることゝ能はず、洛外の邊地の片田舍なれば、都の往來に不便にして煩はしく、且人家少なければ盜難多しと云。

又いきほひあるものい、貪欲ふかく、ひとり身なるものい、輕ろしめらる。寶あれば、おそれ多く、貧しければなげき切なり。人をたのゑば、身他のやつことなり、人をはぐくめば、心恩愛につかはる。世にしたかへば、身くるし。またしたがねば、狂へるに似たり。いづれのところを占め、いかなるわざをしてか、しばしも此身を宿し、たまゆらも心をなぐさむべき。」

○又いきほひあるものい云々　財産ありて權力ある者は、貪樂あくことをしらされば、貪慾心ふかく、又獨身ものは自然經濟せらるゝ〇人をたのめは云々　人に依頼そる人は、その奴隷の如く使役せられ、又人を養育それば、その恩愛にひかれて、心情に使役せらるゝ〇はぐくむとい　鳥が其の子を羽にふくみて、養ふより起りて、そべて養育そることにいふ〇世にしたがへは云々　世俗に從がへは、右の如き有樣にて心苦し、また世に背むけい狂人に似たりと云〇いつれのところを占め云々　さて右の如くなれば、何處に住居を占領し、何業をしてか、暫時もこの身を置きて、心を慰むべきやと云〇たまゆらとい、物に着けたる玉の搖ぎ鬪れ合ふ音の、幽かなるよりいへる語にて轉して暫しはかり露の間なといふ意となるなり。

己が身、父の方の祖母の家を傳へて、久しく彼所にすむ。其後緣

かけ、身おとろへて、忍ぶかたくしげかりしかば、つひゐ跡とむる事を得ずして、三十餘にして、さらに我心と一の菴を結ふ。

○わか身云々　長明、父は長纓、祖父は季長、代々賀茂社の禰宜なり。祖母の傳詳ならぜ。ある說に、二代の后多子の女房なりといへり。さてその祖母の家を傳へられて、久しく彼處にそめりとぇ。こは長明が二十歲前後のことなるべし○其後緣かけて云々　上にもいへる如く、長明の家もと賀茂の神職なれば、長明もその職を望みしに、採用せられぜしてその緣かけ、身分衰微して、世に忍ふまとぢ多く、家をも人にうりわなちて、遂に其處に留まり居ることもならぜして、三十餘歲にて、自ら一の草菴を賀茂に作りて、それに住むことぇありたりとぇ△忍ふかたくしげ云々　金葉集、雜の部に、家を人にわなちてたつとて、柱にかきつけ侍りける、周防の內侍　住みわびて我さへのきのしのぶ草、しのぶかたくしけき宿かな、とある意をとりていへるあり△我心と　我心から、即、自らなとの意。

是をありし住居になずらふるに、十分が一なり。たゞ居屋ばかりをかまへて、はかくしくは屋をつくるまで及ばず。わづかに築土をつけりといへども、門をたつるにたづきなし。竹を柱として、車やどりとせり。雪ふり、風ふく毎に、あやふからずしもあらぜ。所は川原ちかければ。水の難もふかく、白浪のおそれもさわがし。

○是をありし住居に云々　このたびの草菴を、はじめ、長明が住みてありし家に準し比ふるに、今のわ狹くしてもとの十分の一なりとぇ○たゞ居屋ばかりをかまへて云々　たゞ本屋、即、居間ばかりを搆へて、しかと家屋といふほどのものを作るまで到らぜとぇ△はかくしくの、はかわはかどるなどいふ、はかを重ねていへる詞まて、俗に、ハキ〳〵、シツカリなどいふに同じ○わづかまで築土を云々

只纔かに土を築きて、圍をなせりといへども、門を建つる方便なしと云へり。たづきは手着にて、方便の意、即、その資力なきをいふ。車やどり　門内の側に、車を入るゝ所。雪ふり風ふくごとに云々　こゝに、家屋の堅牢ならぬ有様をいへるゝ。即、雪風などのはげしき時は、安心ならぬとゝ。必しもの、しもは助辭にて、語勢を強むる辭。所は川原近ければ　川原は賀茂川原ゝ。白浪のれそれもさわかし　白浪は盜人の異名、後漢の靈帝の時、賊、張角西波谷にて、盜をなせるよりしていふ。こゝは水の難とある縁に、白浪といふ語を用ゐて、水難よりかけて盜難の事をもあらはせるなり。

をべてあらぬ世を念じ過しつゝ、心をなやませる事は、三十餘年なり。その間折々のたがひめよ、おのづからみじかき運をさとをぬ。をなはち五十の春を迎へて、家を出で世をそむけり。

○をべて無常の空なる世を堪へ忍ひ經過しつゝ、心勞せること二十歳頃より五十歳はかりの間、即、三十餘年なりとゝ。○その間折々のたがひめに云々　この三十餘年間に、時々折々事物の交互變動により、我身の不運なるは天命なりと悟りぬとゝ。こゝは本朝文粹の、紀齊名か賦に、花以春榮、葉以秋落　感春秋之遞換、知盛衰之所託、とある意なり。△運とは　字書に流轉運行之謂なりとあり、即、人の身にめくりくる善惡の象、天命のまゝりあわせなどいふ意。○をなはち五十の春を云々　長明天命を悟り、即、五十歳にて、かの賀茂川の草菴より出家せりとゝ。△世をそむけり、そむくとは背向く義にて、浮世を背後よして隱遁せるをいふ。

もとより妻子なければ、をてがたきよすがもなし。身よ官祿あらず。何よつけてか執をとゞえむ。むなしく大原山の雲よふして、又五かへり春秋なんへよける。

○をてがたきよすがもなし　身に妻子なければ、出家をるに臨みて、何も捨てがたき縁もなしとゝ。○執をとゞめむ　官位も俸錄もなければ、執念のとゞまる

べきものなしと〳〵○空しく大原山の云々　世の中には、何も思ひおくことなく、空しく大原山の山中まありて、身をいるゝ場所も定めず、更に又五年の星霜を通過したりと〳〵△大原山ハ、山城國、乙訓郡、大原野の西、即、山城の北西の岡〳〵といふ。

爰ま六十の露ゑがたまおよびて、さらに末葉のやどりを結べることとあり。いはゞ旅人の一夜のやどりをつくり、老いたる蠶のまゆをいとなむがごとし。

○六十の露云々　人生七十古来稀なりなどいひて、六十以上を、まことまはかなき露の消がたにたとへたる〳〵△末葉とは、上に露といへる縁に、此の葉といふ詞を用ゐたるなり。こゝはたゞ餘命いくばくもなければ、其間の假のやどりを請ひたりといふ意。このかりのやどりが、所謂方丈の草菴也。

これを中頃のすみかになぞらふれば、また百分が一にだにも及

ばず。とかくいふほどま、齡い年こにかたふきをみかは折々ま せばし。

○これを中頃のそみかに云々　この方丈を、中頃の住居、即、賀茂川のものに準それば、百分か一にも到らぞ〳〵○とかくいふほどに云々　とやかくいふ間に、齡も年々に老衰し、住家は其時々、即、次第〳〵に狹くなれりと〳〵。

その家のありさまよのつねならず。廣さは三づかに方丈。高さい七尺むかりなり。所をおもひ定めざるが故に、地をきめて作らを。土居をくみ、打おほひをふきて、つぎめごとまかけがねをかけたり。もし心にかなはぬことあらば、やをく外に移さむがためなり。その改め造るとき、いくばくの煩ひかある。つむとてろわづかに二輛なり。車の力をむくゐる外い。さらに他の用途

いらず。

○その家のありさま云々　この方丈のたてかたは、普通尋常の有様にあらぎと なり○方丈　この名の起りは、唐、王玄策、至二天竺維摩室一計レ之得二十笏一故云二方丈室一、一丈四方之義、笏尺也。とあるにてしるべし○所をれもひ定めざるが故に云々 必ここに一生住むべしと思ひ定めざるが故に、土地を占領し作らぎとこ○土居 四壁のこと○打おろひ　屋根のこと○つざめとにかけがねをかけたり　四壁の屋根のつざめには、かけがねをかけたりとこ。是はとりはづしの容易に出来るやうにとあり○いくばくの煩かある　いくばくの煩あるか、即、いくらも面倒なしとこ○つむところわづかに二輛なり、他所へ移らんとする時、家をとりまぼちて車にて運ぶも、わづかに車二臺にて事足れりとこ○車の力をむくゆる外は云々 引越の時は、たゞ車力の人足に報酬をる入費の外は、さらに他に費用のかゝるまとなしとこ○用途は入費のこと。

いま日野山のおくにあとをかくして、南ゐ假の日がくしをさし出して、竹の簀をしき、その西に閼伽棚をつくり、中にい西の垣にそへて、阿彌陀の畫像を安置し奉り。落日をうけて眉間の光とす。かの帳のとびらは、普賢ならびに不動の像をかけたり。

○日野山のおくにあとをかくし云々　日野山は、山城國宇治郡、木幡山の東北に當れり、即、宇治より大津海道、六地藏より五六町東にあり。今に岩殘りて長明石といふとぞ。此處を外山となつけ、こゝに方丈を作りて跡をかくし、即、隱遁せしなり○日かくし　日隱の義にて庇のこと○竹の簀　竹にて粗く編める席のまと○閼伽棚　閼伽い梵語水のまとこ。この棚は、佛に水或い花など供ふる棚○落日をうけて眉間の光とを落日は、入日の事こ。佛經に、彌陀如来は眉間に光ありて、その光を以て極樂世界を照らをなぎいふ、故に入日の光を以て畫如来の眉間の光によそへたるなり○帳のとびら　帳は幕の類にて垂るゝものをいふ。とびら

は戸庁にて、開き戸の事△阿彌陀、普賢、不動、いつれも十三佛の一なり。十三佛とは、不動、釋迦、文珠、普賢、地藏、彌勒、藥師、觀音、勢至、阿彌陀、阿閦、大日、虚空藏等をいふ。

北の障子の上にちひさき棚を構へて、黒き皮籠三四合を置く。すなはち和歌、管絃、往生要集、ごときの抄物をいれたり。傍に琴。琵琶おの〳〵一張を。たついはゐるをりごと、つぎびは是なり。

○皮籠三四合　皮にて包み作れる匣三つ四つなり。身と蓋とあるものを數ふる名稱を合といふ○管絃　こゝにては音樂書といふ事ゝ。全体、管絃、字書に吹曰管撫曰絃とある如く笙、笛、琴、箏の類をいふなれど、この下に抄物とあれば、かゝる書類、即、樂府、琴操等の抄物をいふ。抄物とは拔書のこと○往生要集　源心といへる僧の書きたる經文の要集ゝ○をりごとつぎびは　琴、琵琶の、常に折たゝみおきて、用ゐるときつぎ合せてつかうやうにしたるものをいふ。今のつぎ三味線の樹へかたゝ同し。△一張、張とは弓琴などの如き張るものを數ふる名稱。

東ゝそへてわらびのほゞろをしき、つかなみを數て、夜の床とす。東のかべに窓をあけて、こゝに文机をつくり出せり。枕のかたにすびつあり。あれを柴折りくぶるよをがとす。菴の北に少し地をしめ、あばらなるひめ垣をかこひて岡とを。をないちもろ〳〵の藥草をうゑたり。

○わらびのほとろ　蕨の穂の延ひで、荊棘ゝなれるものをいふ○つかなみ　束並の義、藁を束ね編み並べて敷物ゝ作りたるもの、俗に、ネコ、又はネコタともいふ○そびつ　炭櫃の義にて、圍爐裏のことなり○よをが　寄處ゝ○あばらなる　ひめ垣　あらくまばらなる丈低き垣をいふ。まゝのあばらい、あばら骨などのあ

ばらに同し。荒たる意とは異なり。

假の菴のありさまかくのごとし。そのところのさまをいはゞ。南にかけひあり。岩をたたみて水をためたり。林のきちかければ。つまぎを拾ふにともしからず。名を外山といふ。正木のかづら跡を埋めり。谷しげくれば西い晴れたり。觀念のたよりなきよしもあらを。

○南にかけひあり云々　南に懸樋あり、うれより落くる水をば、岩の重疊したる間の凹りたる處に溜めれきて、用水とせるゝ〈かけひは懸樋の義にて、俗にとひ竹などいふ戸樋のこと○つま木　爪木の義にて、爪にて折取ることを得る薪、即、小枝の薪をいふ○名を外山といふ　戸山の義、奥山に對して山の戸、即、山の入口の處をいふ古今集に深山にゝあられふるらし外山なる、正木のかつらいろつきにけり。とあるによりて、この方丈をたてたる山の名を、外山といへるなりといふ○正木のかづら　夏草の名、深山に生ひて、玉椿に似て、夏纏をるものなり、本草拾遺に載たる、扶芳藤これなり、冬季紅葉をるものにて、今つるまさきといふものありといふ○跡を埋めり　道あともなく、夏草のはひこれるをいふ○谷おけれと云々　谷多く方々を取圍めども、西方はあきて見晴しありとゝ○觀念のたよりなきにしもあらを　觀念は佛經の語にて觀して念ふこと、即、目を閉ちて心を浮べ悟ること天台止觀に、寂而常照名觀、念者但念涅槃寂滅不念餘事云々とあり。まゝい上の句は西の方晴れたりとあるをうけて、されば常に西方彌陀佛を向ひて、その道を念をるに便ありと結ひたるなり。

春い藤なみをみる。紫雲のごとくまして西方に匂ふ。夏いほとゝぎすを聞く。かたらふごとに死手の山路をちぎる。秋はひぐらしの聲耳にみてり。空蟬の世をかなしむかと聞ゐ。冬は雪を

憐む。つもりさゑるさま罪障にたとへつべし。

○藤波　藤の花のこと、藤の花房なびきて、波の如く見ゆるよりいふ○紫雲のとくにして西方に匂ふ　紫雲とい、藤の花の色の紫なるを、雲によそへていへるなり。西の方に匂ふとは、西方極樂淨土によせて、彼方の興ゆかしきさまをいへるなり○かたらふことゝ死手の山路をちざる　かたらふは、語り合ふといふ詞の約りたるゝて、まくい長明が鄭公などを友として、其なく聲をきゝあはれを感して、其鳥の名ゝ鶯ある（鄭公の異名をシデ（賤）の田長といふ。こは勸農の意ゝてあく鳥なればいふとそ）シデ（死出）の山、即、冥土ゝ、われもともにゆかむと契約をるまとゝ○ひぐらし　蟬の一種なり、日暮になくものをいふ○空蟬の世を云々空蟬ゝもと現身、即、現在の人の身といふより轉したる語ゝ。人も死して尸を殘し、蟬もその殼をとゞめて去る、故に中古より空蟬と、現身とを同しやうゝ用ゐることゝなりて、この世。人。命。などの枕詞とせり。こゝは日くらし　身も、浮世の無

常をかなしむに似たりとゝ○冬は雪を憐む云々　憐むといふ詞ゝ二義あり。甲はかなしむ意、乙は愛する意、こゝゝ乙の意なり○罪障　は罪を作りて往生の障となるをいふ。即、雪のつもりきゆる有樣は罪障の消長にたとふべしとゝ。

もし念佛ものうく、讀經まゑならざるときは、みづからゆをみ、みづからはたるに、さまたぐる人もなく、また恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、ひとりをれば口業ををさめつべし。かならず禁戒をまもるとしもなけれども、境界なけれむ何につけてかゆぶらむ。

○もし念佛ものうく云々　ものうきとは、何となく憂くつらくして、心氣のそゝまざるをいふ、即、念佛を唱ふることの氣に進まず、經文を誦することも氣に合はず、心から真實に讀經せんと思ゝぬときは、休息し怠るも、誰ありて妨げとが

むる人もなく、また誰といひて恥つべき友もなしとゝ〇殊更に無言をせされども云々　特別に佛戒を守りて、無言なるにハあらされど、獨居のことなれば、自然口より出つる罪業の戒は、修むべしとゝ△口業とハ、惡口、妄語等口にて作る罪業をいふ〇境界なければ何につけてかやふらん　境界とハ、事物に接そる地位をいふ、即、耳、目、鼻、口等の事物に接そる地位にて、長明は山中の獨居なれば、その境界に他に接そるものなければ、佛の禁戒ゝ注意せざるも、其戒をやふるべき要なしとゝ。

もしあとの白波に身をよする朝ゝハ、岡の屋ゝゆきかふ舩をながめて、滿沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風葉をならす夕には、潯陽の江を思ひやりて、源都督のながれをならふ。もしあまり興あれば、しば〳〵松のひゞきに秋風の樂をたぐへ、水の音ゝ

流泉の曲をあやつる。藝はこれつたなけれども、人の耳を悦ばしめむとにもあらず。ひとり調べ獨詠して、みづから心を養ふばかりなり。

〇もしあとの白波に云ゝ　ある時は我身のはかなきことを、白波に似たりと思ひよせて、宇治川ゝ往來そる舩をながめ。滿誓法師の風采ゝならふとゝ△滿沙彌は、沙彌滿誓のことゝして、即、尾張、守左大辨、正五位上、笠朝臣麻呂也養老五年四月、太上天皇の御爲めに、出家せし人なり△沙彌、この語ハ、元來梵語にて、漢字をあつれは、息慈といふ意、一切の情を止息して、慈悲を以て衆生を救ふ義なり

といふ△岡の屋は、宇治川の東岸にありし藤原無經の別莊にて、岡屋殿といへり△風情をぬすみといへるハ、滿沙彌の風を真似そるを、長明か卑下して其風をぬすむといへるなり。さて、滿沙彌の歌に、世の中はなにゝたとへんあさほらけ、漕きゆく舟のあとのしらなみ、とあるによりてゝはかゝれたるものあり〇もし

桂の風葉云々　ある時は、木の葉をならせ風の音に無常を感して、彼の白樂天の潯陽江の事を思ひ合せ、源都督の風流に習ひて、思ひを晴らせとぞ。こゝは潯陽江のことを引きてかけるなり△潯陽江のことは、唐の元和十年に、白樂天、九江郡の司馬に左遷せられ、翌年の秋潯陽江に船を浮かべ、船中にて琵琶を彈せるを聞きて、琵琶行の引を作れり、曰、潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋瑟々、主人下馬客在船、醉不成歡慘將別、別時茫々江浸月、莫辭更坐彈一曲、爲君翻爲琵琶行云々とあり、さて本文は楓葉に桂を引き、琵琶の緣より源都督の事に及ぼせるなり△源都督は、桂中納言經信のことゝ。都督とは、太宰帥の漢名なり。この人は、宇多源氏にて、太宰の帥なれは、源都督といへるなり。この人故ありて、太宰權帥に貶せられ、太宰少貳資通の弟子とありて、琵琶の名人となれり。その流を桂流といへり。別業桂の里にありたれはなりといふ○もしあまり興あれは云々　ある時は、餘興に乘じて、松風の音に合せて、秋風の樂を調和し、流水の音に合せて、流泉の曲を操縱をとゝ△秋風樂は、琴曲の名なり△流泉の曲は、琵琶の曲なり。○ひとり調へ、調琴してそは調りしてそは琴を調べ、また調して歌ふことゝ。

また麓に一つの柴の菴あり。則ち此の山守の居るところなり。かしこに小童あり。時々きたり相訪ふ。もしつれ〴〵なるときは、是を友として遊びありく。かれい十六歳、われいむそぢ、其の齡ことの外なれど、心を慰むる事はこれに同じ。或はつばなをぬき、岩なしをとり、又ぬかごをもり、芹をつむ。或はすそわの田井にれりて、落穗をひろひて、ほぐみをつくる。

○また麓に云々　長明の菴の外、外山の麓に一の草菴あり。これは此山の山守、即、番人か居る所なりとゝ○つれ〴〵なるときは、退屈なる時の意。元來つれ〴〵は、連々の意にて、寂然として事なく、從ひて物思ひの連々とつゝく義より、轉して徒然、即、退屈なゞの意となる○其齡ことの外なれど云々　十六と六十とは

年の上よりいへば隔あれど、無我無欲なる心に、老少相似て心を慰むる事相同じ。

とゝ○つはなは、ちばなともいふ、即、芽花ゝ○岩なし　はまなし、こけもゝとも

いふ果物ゝ○ぬかごをもり　ぬかごに、薯蕷の實、其の蔓の葉の間に生ずるもの

也今むかごといふ。それをとりて、器物に盛り入るゝ○そゝわの田井　そゝわに、

山の麓の邊といふこと、わに萬葉集に、田の字をかけり。浦田。藏田などいひて、浦

邊磯邊といふも同じ。田井は、井田ともいひて、たゞ田といふことゝ○ほくみ　稻

穂を組みたるもの、穂掛ともいふ。収納の祝として、農家の門戸などゝ、神に奉る

とて、掛くることもあるよし、藻塩草ゝ見えたり。

もゝ日うらゝかなれば、嶺によぢのぼりて、遥かに故郷の空を

望み、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師をみる。勝地に主なければ、

心を慰むるに障りなし。あゆみ煩ひなく、志遠くいたるときは、

是より峯つゞき、炭山を越え、笠取を過ぎて、或に岩間にまうで、

或は石山ををがむ。

○日うらゝかなれに　うらゝかとに、天氣佳麗にして、長閑なるをいふ○故郷の

空を望み　長明の古郷、即鴨の邊を遠望せるゝ○木幡山　山城宇治郡にあり○

伏見の里紀伊郡にあり○鳥羽　これも紀伊郡にあり○羽束師　乙訓郡にあり○

勝地に主なければ云々　勝地とに、景色の勝絶なる地をいふ。白氏文集に、勝地本

来無二定主一、大都山属二愛山人一、などある意なり○あゆみ煩ひなく云々　歩行身に適

ひて、足のつかれ、即、煩勞を覺えず、心の進み行くときは、外山より峯つたひに、

炭山、笠取或は石山までもいたるとゝ△炭山は宇治にあり。日野山つゞきゝ△笠

取は宇治郡、醍醐の東にあり　岩間近江國、志賀郡ゝあり。觀世音を安置したる

處なり△石山　これも、志賀郡石山寺ゝ、

もゝは又粟津の原を分けて、蟬丸翁が跡をとふらひ、田上川を

渡りて、猿丸太夫が墓をたづね。かへるさにに、折につけつゝ櫻

をかり、紅葉をもとめ、蕨ををり、木のみをひろひて、且は佛に奉り、且は家づとにす。

○粟津原　これも志賀郡にて、勢田と、膳所の間〻○蟬丸翁が跡をとふらひ　蟬丸は傳詳ならぬ。或書に、仁明天皇の御時の人、道人にて、常に髮を剃らぬ、世人翁と號ぬとあり。長明が無名抄に、會坂の關の明神と申ぬ、むかし蟬丸の彼のほらやのあとを失ひぬして、そこに神となり住み給ふなるべし、と見えたり、即、このところを云○田上川　近江國、栗太郡、宇治川の上にあり○猿丸太夫が墓　有名の歌人あれども傳未詳ならぬ。或說に、稱德天皇の朝の弓削道鏡なりともいひ、また聖德太子の孫弓削王の別名なりともいふ。墓所は無名抄にある人、田上の下に曾束といふ所あり、そこに猿丸太夫の墓あり、庄の境にて、そこの柴にかきのせあれは、皆人しれりとあり○歸るさ　歸る方、即、かへる時といふに同し○折につけつゝ云々　其の時に合ひたるもの、即、冬は紅葉、春は櫻あゝ其時節々々につけ

つゝ。

もし夜しづかなれば、窓の月に古人をしのび、猿の聲に袖をうるほす。草むらの螢は、遠く真木の島のかゞりびにまがひ、曉の雨は、おのづから木の葉ふく嵐に似たり。山鳥のほろ〳〵と鳴くを聞きても、父か母かとうたがひ、蜂のかせぎの近く馴れたるにつけても、世にとほざかるほゞを知る。

○窓の月に云々　閑夜窓前の月に對しては、往事を追懷し、古人を戀ひ慕ふとゝ。枕の草紙に、過ぎにし方戀しきもの、月のあかき夜など同情なり○猿の聲に袖をうるほす　古より猿の聲は、人のあはれを催すものにいひ來れり。古樂府にも、巴東三峽巫峽長、猿鳴三聲淚沾衣、などあり○真木の島のかゞり火　真木島は、山城國、久世郡にて、宇治川の西にあり。昔かゞり火をたきて、魚を捕れる名所なり。かゞり火とは、篝火をかきて、漁者か鍬もて篝(鍬の籠柱あり、並て上に木を焚く

の）を作り、火を盛りて水を照らせるもの○山鳥のほろ〳〵と鳴くをきゝ云々　ほろ〳〵とは、涙のこぼるゝさまをいふ。それより轉して、なく聲にもいふ。まゝは、玉葉集の、行基菩薩の歌よ、山鳥のほろ〳〵となく聲きけば父かとそおもふ母かとそおもふ、とある歌によられたるなり。またこの歌の、父母といふことは、梵網經に、一切男子是我父、一切女人是我母、我生〻無〻不〻從〻之受〻生故六道衆生、皆戴父母云〻、などありそれによれるなり○かせぎの近く馴れ云〻　かせぎは、鹿の一名。元來鹿は、人里近き處に居らぬものなるに、それが長明の住所近く來りて、馴れたる樣子にても、世間の人と遠く離れたる程度を知るべし。

或い埋火をかきおこして、老のねざめの友とす。おそろしき山ならねど、ふくろふの聲をあはれむにつけても、山中の景色折につけてつくるおとなし。いはんやふかく思ひ、深く知れらん人のためには、是にしも限るべからず。

○埋火をかきおこして云々　埋火とは、灰などの灰に埋めたる火をいふ。年老ねざめ勝なるものなるに、相語ふ友もなければ、埋火をかきおこして友とし、なぐさむとゝ○おそろしき山ならねと云々　日野の外山いれそろしき深山ならねど、（梟は多く　深山に居るものなれいいふ）梟の聲など聞えて、哀憐の情發するにつけても、山中時々折々の景色限りなしとゝ○いはんやふかく思ひ云々　長明かゝ如きものにても、かくのごとき無量の觀あるものを、況やまして、思慮識量ともに深き人のためには、その觀ことさらまさるべしとゝ。こゝは長明か謙遜の詞ゝ。

大かた此ところに住み初めしときは、あからさまと思ひしかど、今すでに五とせを經たり。假の菴もやゝふる屋となりて、軒よは朽葉ふかく、土居に苔むせり。おのづから事のたよりよ都をきけば、此山に籠りゐて後、やむごとなき人のかくれたまへるもあまたきこゆ。ましてろうの數ならぬたぐひ、盡して是をし

るべからず。たびたびの炎上ほろびたる家またいくそばくぞ。

○大かたは大抵の意○あからさまといふ假初、暫時などの意○朽葉は落葉の朽ちたるもの○土居とは四壁のこと○おのつから事のたよりに云々　自然事の序につきて、都の樣子を尋ぬれば云々○やむことなき人とは、止を得ざる、打捨がたき人などいふ義より、轉して大切なる、即、貴き人といふ意となる。さてその貴人も、數多死に失せたりときゝぬ、況や數ならぬ卑しき人々の、なくなりたるは數へ盡すべくもあらずと云々○たびたびの炎上　炎上といふ火災にて燒くることゝ。この火災の事實は、前既に述べたるが如し○いくそばくそ　いくはくぞよ云。いくそばくは、幾十許の轉そは後詞にて、問ひかくる意を示すもの。

たゞかりの菴のみのぞけくして、むそれなし。ほどせむしといへども、夜ふす床あり。晝居る座あり。一身をやどすに不足なし。かうないちひさき貝をこのむ。是よく身をしるによりてなり。みさごい荒磯にゐる。則ち人を恐るゝがゆゑなり。我又かくのごとし。身をしり世を知れゝば。願はず。まじらはじ。たゞしづかなるを望みとし、うれひなきを樂みとす。

○たゞかりの菴のみ云々　都は災難多くして、人家ともに滅亡せること斯の如し、されど、たゞ山中の假の庵のみは、穩和にして炎上などの恐れなしと云○かうな、かみなの音便の轉、かみなは、蟹蜷の約、寄居蟲に同じ、蟹の類云。他の貝の空殼を求めて、其中に宿るによりて、寄居蟲ともいへるなり○是より身をしるとは、其身の分をしる、故に少なる貝を求むと云○みさご　雎鳩、又鶚などとも書く、鷲の類水邊の山中に棲み、多くは水邊に出て魚を捕り食ふ○荒磯は、荒浪の打よせる磯、即、人の容易に近づくとあたはざる所云○身をしり世を知れは云々　長明また身のはかなきこと、世のあたなるを知れる故に、かうあ、みさごのごとく、

その分をしりて、富貴を願はぜ、世間ゑ交はらぜ、日野の外山ゑ隱遁して、たゞ清閑なるを望み、憂なきを樂みとせとなり。

すべてよの人の住家をつくるならひ、かならずしも身のために はせぜ。あるい妻子眷屬のためゑつくり、或い親眤朋友のために作る。或い主君、師匠、及ひ財寶牛馬のためにさへこれを作る。我今身のためにむをべり。人のためゑ作らぜ。ゑいかんとなれば、今の世のならひ、此身のありさま、ともなふべき人もなく、たのむべきやつこもなし。たとひ廣くつくれりとも、誰をかやどし誰をかすゑむ。

○をべてよの人の云ゑ　凡世間の人の家を作る習慣を見るに、必しもその一身を容るゑためゑせぜとゑ○眷屬　眷は、顧念、即、親屬の意○親眤朋友　親眤とい、したしきをいふ。朋友は、字書に、同門曰朋、同志曰友とあり○財寶馬牛云ゑ

妻子、朋友の爲めのみならぜ、猶、財寶を置き、馬牛を飼ふべき場所をさへ設くとゑ。てゑは發心集に。我か身のおきふぜ所は、一二間に過きぜ、その外い、皆親しき、疎き人のため、もしい野山に住むべき、牛馬の料をさへ造りれくにいあらずや、かくよしなき事に身をわづらはし、心をくるしめて云々とあるに似たり○今の世のならひ云々　尚世の、習慣は、富貴を貴み、貧賤を嫌ふならひにて、今長明がかゑる身の有樣あれば、伴ふなる人もなく、頼みとそべき、奴僕もなしとなり。

それ人のともたる者は、とめるをたふとみねんごろなるをさきとす。かならずしも情ありると、直なるとをば愛せず。たゞ糸竹花月を友とせんにいしかし。人の奴たるもれい、賞罰の甚しきをかへりみ、恩顧のあつきを重くす。さらにはごくゑあいれぶといへども、安くしづかなるをいねがはず、たゞ我が身をや

つこをするにはしかず。

○人のともたる者は云々　今の世の人い、己れに利ある富貴の人と、己れに懇懃なる佞人とを第一の友とを、必しも真の有情なる人と、正直なる人とを愛せぬ、かるあさましき世の中にはい、たゝ花月を友とし、絲竹を弄ふは如かじとゝ△てゝは慶滋保胤が、池亭記に、人之爲友者以勢以利、不二以淡交一不如無友、とあるによられたるならん△絲竹　絲とは、琴、琵琶の類をいひ、竹とい笙、篳篥の類をいふ○人の奴たるものい云々　奴僕も、また今の世は利よりのみに、走りて賞與報酬を甚しく望み、恩顧、即、めくみを受くる多きを貴ふとむ、かくるいやしき心なれは、更に特別に養ひあはれむといへとも、安寧なるをば願いぞ、ひたすら直接の恩典利益のみを願ふ、かゝる奴僕の爲めに心を勞せんよりは寧、わか身を使役するに如かぞとゝ○はぐくむは、はぐくむに同し、はくゝむは、羽含むの意にて、親鳥の羽交をもて、雛を被ひ育つるより起りて、養育といふ意に用ゐる詞ゝ。

もしなすべきことあれば、則ちおのづから身をつかふ。たゆからをしもあらねど、人をしたがへ、ひとをかへりみるよりはやをし。もしありくべき事あれば、みづからあゆむ。苦しといへぞも、馬鞍牛車と心をかやまをまはしかを。今一身をまかちて二の用をなす、手のやつこ、足の乘物、よく我心にかなへり。

○れのつから身をつかふ　爲をべき用事あれは、即、己れ自から其身を仕役をとゝ○たゆからをしもあらねと云々　手足を勞をる故に、弛疲からぞ去もあらねと、奴僕を召使ひて、其人とともに心配せんよりは心安しとゝ△たゆしとは、疲れて萎ゆる形狀をいふ。俗ゝ手足のダルイといふもこの詞ゝ。しものしは助辭ゝ○苦しといへとも云々　手足を勞をるは苦しといへども、乘物の牛馬の爲めに、心を惱ませ程の心苦にい及ばぞとゝ○今一身をわかちて云々　一身を分かちて手を奴僕としてつかひ、足を乘物として、心よまかせて行く。されい手足ともに

よく我心に適ふとゝ。

又心身のくるしみを知れゝむ、苦む時はやすめつ。まめなるときいつかふ。つかふとてもたびゝすぐさず。ものうしとても心をうごかすことなし。いかに況むや、つねにありき、つねに働くい、是養生なるべし。何ぞいたづらにやすみをらむ。人を苦しめ、人を惱ますは、又罪業なり。いかゞ他の力をかるべき。

○まめなるときとは、健全なる時の意。元来。まめといふ詞は、真實の轉、即、深切ま働く事より轉して、身體手足の健全なることにいふ○ものうしとても心をうてかをことなし　ものうしとい、何となく憂きをいふ、即、心の真實ならぬをいふ。ことゝい、氣のそゝまぬして、慵く、面白からざるときも、心を動かして、喜怒哀樂の感慨を引起そことなしとゝ○いかゞ況むや云々　我か手足を仕役そるときは心に適ひてよろしきのみならぬ況して、尚、平常歩行し、また勞働そるは、身躰

衛生になることゝ勿論なりとゝ○罪業は罪となる所業といふこと○いかゞ他の力をかるへき　いかゝは、いかでかの意、おのれ安逸にして、何そ他人の力をかるべき、即、他人をつかふべき理なしとゝ。

衣食のたぐひ又おなじ。藤の衣、麻のふそま、うるにしたがひていだへをかくし、野べのつばな、峯のこのみ、わづかに命をつぐばかりなり。人にまじはらざれば、姿をはづる悔もなし、かてともしければ、おろそかなれども猶味ひをあまくを。をべてかやうのこと、樂しく富る人に對していふにいあらず。唯我身一つにとりて、昔と今とをたくらぶるばかりなり。

○衣食のたくひ又おなじ　奴僕も他をたのまゞ、衣食も又同しく、こと更に求めゞとゝ○藤の衣　葛布にて製せる衣ゝ。古の賤民の着せしものゝ○麻のふそまふそまは、臥裳の轉にて、夜具のこと、即、麻布にてつくれる夜着ゝ○かてともし

けれい云々　かてい種なり、食物をいふ。つねに食物不足なれば、疎末なる物を食しても、猶味ひありとゝ○そべてかやうの事云々　世捨人の境界、草屋のこと、衣食の事など、そべて上に述べたる事どもは、富貴安樂の人に對して、れのれの如くせよといふにあらず、たゞ、れのれ一身の上につきて、青俗世にありし時の有樣と、今の出家せる時の有樣とを、比較していふまでのことなりとゝ。

大かた世をのがれ、身をすてしより、うらみもなく、おそれもなし。命は天運にまかせて、をしまず。いとはず。身をば浮雲になずらへて、たのまず。またしとせず。一期のたのしびは、うたゝねの枕のうへにさはまり、生涯の望みは、をり〳〵の美景に殘れり。それ三界いたゞ心一つなり。心もしやすからずい、牛馬七珍もよしなく、宮殿樓閣も望みなし。

○うらみもなくおそれもなし　論語に、天不怨人不尤。又、性空上人の、人不知我無讃無毀、我亦不知人無恨などいへる意○命は天運にまかせて云々　我一身の天運に任せて、生を惜まず、死を厭はずとゝ。論語に、死生有命などの意によれるゝ○身を浮雲になぞらへて云々　浮雲の風のまに〳〵靡きゆく如く、一身を自然に任せて、物に依頼せず、また、不足を感ぜずとゝ△まだしはいまだし(未)の約語なり、即、未時を得ず、或は、不遇、不足などの意○一期のたのしびい云々　一期とは、生涯といふこと。うたゝねとは、假寐といふに同じ、即、人間一生涯の事は、暫時假寐の夢の上に盡くとゝ○生涯の望みい云々　一生の間の希望は、他に存せるなく、たゞ四季折々の風景のおもしろきに、心とまりて殘れりとゝ○それ三界は云々　三界とは、欲界、色界、無色界をいふ。佛者この世をさしていふ。さてこゝは、華嚴經に、三界唯一心、心外無別法、心佛及衆生、是三無差別などの意にて、この世は各自の心ゆき一つにして、苦も樂もあるものなりとの意を含む△牛馬七珍もよしなし　牛馬七珍のこと前にいへり。よしなしのよしは由緣の義にて、即、心樂しからざれい、牛馬七珍宮殿樓閣も、由なくたのむに足ら

ぞ。望むゝ足らぎとゝ。

今さびしき住居一間の菴、みづから是を愛す。れのづからみゃこにいでゝ、乞食となれることをはづといへども、かへりてこゝに居るときい、他の俗塵に着することをなはれふ。もし人このいへることを疑はゞ、魚と鳥との分野を見よ。魚は水まあかは。魚にあらざればその心をいづくにか知らむ。鳥は林をねがふ。鳥にあらざればその心をしらぎ。

○みやこにいでゝ乞食となれる云ゝ　都に出て、乞食、即、托鉢（僧の鉢を持して人に就きて金錢をこふ事）をるを恥づと雖とも、他人、即世俗の人の利欲に執着をるに優れり、故に反て他の人の色、聲、香、味、觸、法の六塵ゝ執着せるを憫ふとゝ○もし人まのいへるこを疑はゞ云ゝ　長明かいへることを疑はゞ、誠に魚又い鳥なぞの有樣を見よとゝ△分野とは、境界、有樣なぞの意。元来この言は、古き天文地理

學の語、大地を區分して、天の星宿に配當して呼ふ語なり。下學集に、分野は有樣の義ゝともあり○魚にあらざれば云ゝ　魚にあらざれバ、水の味を知らぎとゝ。莊子に、子非魚安知魚樂とあるによれるならむ。

閑居の氣味もまたかくのごとし。住まずして誰かさとらむ。そも〳〵一期の月影かたふきて、餘算山のはゝ近し。忽ちに三途の闇に向はむ時、何のわざをかかこたむとする。

○そも〳〵一期の月影云ゝ　そも〳〵この語は、元来其亦〳〵の義なれど、意味なく發語に用ゐるこあり、こゝもその例ゝ、即、抑長明が一生も、月の西山に傾きたる如く、餘算、即、死に近しとゝ○忽ちゝ三途の闇ゝ向はむ時云ゝ　三途の闇ゝ向はむ時とは、死ゝ望まむ時といふゝ同し△三途とは、佛經に地獄爲火途、餓鬼爲刀途、畜生爲血途、と見えて、死に行く道途をいふ△かこたむとは、假言即、託といふ詞を活用せるものにて、轉じて、佗言といふに用ゐらる、されは、こゝにては、今死な

ひとそる時に望み、いかなる作善功德をして來たれり、と佛の前にて佗言をせむ

實に佛に對して言譯なしとぞ。

佛のをしへたまふおもむきい、おとしふれて執心なかれとなり。今草の菴を愛するも科とを。閑寂ふ着するも障りなるべし。

いかで用なき樂みをのべて、むなしくあたら時をすごさむ。

○佛の人ををしへたまふ云〻　佛の教とそるところは、そべての事物に對して、執着の念を起そなかれとありとぞ。○今草の菴を愛するも云〻　佛教によれば、今長明が、この草菴ふ愛着そるも科あり、又閑寂に居て、花月に愛着そるも、罪障ありとぞ。○いかゞ用なき樂みをのべて云〻　無用の樂事をのべて、空しく大切の時を過ごそことゝ、いかでかせんとぞ。△あたらとゝ、俗ニアッタラ惜シイなどいふ意、即、大切といふ意にあたる。

しづかなる曉、このことわりを思ひつゞけて、みづから心にとひていはく、世をのがれて山林にまじはるは、心ををさめて道をおこなはむが爲めなり。しかるを汝が姿はひじりに似て、心いにごりにしめり。住家ハ則ち淨名居士の跡をけがせりといへども、たもつところわづかに周梨槃特が行ひにだにも及ばず。もしこれ貧賤の報のみづから惱ますか。はた又妄心の至りてくるはせるか。

○しつかなる曉云〻　山中殊に靜閑なる朝、此道理即、事〻物〻につきて、執着の念を起そ勿れといふまとを思案して、自ら心にとひて曰くぞゝ、即、自問せるぞゝ。○汝か姿はひじりに似て云〻　汝長明が姿ハ、聖僧にも似たりと雖とも、其心は事物に愛着して、濁世の塵埃に感染し、俗人の如しとぞゝ。こゝは、維摩經に、雖ニ被染衣、心猶未染者、未染ニ四教大乘之法、此則雖是沙門、名曰ニ白衣一とある意なり。○住家は則ち淨名居士云〻　長明が住家ハ、方丈にて、淨名居士、即、天竺の聖

僧維摩詰といへるが住せし、方丈の住家に準據せりといへども、釋迦の最劣等の弟子たる、周梨槃特にだも及ばもとゝ○もしこれ貧賤の報の云々　これ或は長明貧賤なるために苦しみて、修行の足らざるか、將又妄心起りて、修行を惑亂せしむるかとゝ。まゝまで自問ゝ。

そのとき心さらに答ふることなし。たゞ傍に舌根をやとひて不請の念佛兩三返を申してやみぬ。時に建暦の二とせ、彌生の晦日比、桑門蓮胤、外山の菴にして、これをしるす。

月かけは入る山の端もつらかりき
　たにぬひかりを見るよしもがな

○そのとき心さらに答ふることなし　前の如く問ひつめられて、さらに答ふることなしとゝ。これ自答ゝ。○たゞ傍に舌根をやとひて云々　答へよ窮せる故に、傍ら近く舌をやとひ來て、念佛兩三度申して止みぬとゝ。△不請の念佛とは、返べ

よ窮して、止を得ず念佛してのかるといふ如き、正しからざるものなれど、佛も請け給はざるべしとの意にて、不請の念佛といへるなり○建暦二とせ云々　建暦は順德天皇の御代△彌生はイヤオヒの約、即、草木彌生の意にして、陰暦三月の稱△晦日は、月隱の約。陰暦にて、月末の月の光の全く缺けて影なき頃なればいふ○桑門　沙門と同じ共に梵語にて僧の泛稱○蓮胤　長明の法名○月かげは云々　月影は誠に有難きものなれど、なほ山の端に入りて仰ぎ見るまとを得ざる遺憾あり、何とぞ常住絶えぬ光明を見るよしのあれかしとゝ△絶えぬ光とは、阿彌陀佛の光をいふ。さてこの歌は、新勅撰集に出て、十二光佛の心をよみ侍りけるに、不斷光佛をよめる、源季廣とあり。季廣は、源秀無の子にして、長明と同時代の人あり、されば、この歌は、長明のにあらざるべし、たゞこゝに似つかはしきまよりて、後人の加筆せしものゝつたはりたるにてもあらむか、猶異本にこの歌のなきもありといふ

方丈記終

62
3757

62
377

國語詳錄

飯田祐夫